Partner light

しんる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｐａｒｔｎｅｒ　ｌｉｇｈｔ

【Ｎコード】
Ｎ４５７６Ｄ

【作者名】
しんる

【あらすじ】
暗い森、神秘の光・・・から始まるギャグファンタジー！１～３話ずつで話が途切れます。軽い気持ちで読んでもらえるとうれしいです。

Partner light1（前書き）

ギャグです。

Partner light1

広大な森にひと筋の光の柱
夜の森はその光を飲み込もうともがいた。しかし
結局勝ったのは柱
光は夜の闇を吸い込み

Partner light #1

光の爆発
音もなく
振動もない
静かな爆発
それが唐突におさまると
後に残るのは闇の森
ただの森
何もなかったようにたたずむ

森の中は昼間でも薄暗い。
そこを18歳ほどの男が歩く。
髪の色は深い蒼。瞳はアメジストの様
背にクレイモア、つまり両手剣を背負っている。
いかにも剣士、である。
・・・
俺は息を吐く。
こういうモノローグを自分で入れるのはかなり楽しい。
ついでに今までのところで嘘はついていない。
俺は今年18歳になる男だし、不釣合いな高価なクレイモアを担いでいる。髪は濃い青だし、目は紫だ。

ほら、うそじゃないだろ、って小説じゃあ見てもらえねえよな。
てことであとは読者の皆様の想像にお任せだ。イメージメイクってやつだな。
かっこよく想像してもらいたいところだ。
さて、なぜ俺がこんなところにいるかというと・・・なぜだ？
森に入ったのはいいが方向がわからなくなって・・・・・・・迷子か
肩を下ろす。
ふと立ち寄った森にこんな強敵がいるとは・・・
さすがの俺でも予測不可能だったぜ。
どうすっかなー。
そのとき俺は異変を感じた。なんか暗くなったんだよ。
太陽はまだ真上にある。いちおう上を向いて確認
やっぱ真上だ・・・まぶしいぜっ。
そして突然太陽よりまぶしい光が背後から俺を襲った。
まさか「ナントカ」っていうエネルギーか？下手すると被爆するやつ
俺はそこから離れようとした。怪我したくねーもん。
なんでかなあ？
こういうときこそ俺の本能は、身体は、危険を求める。
つまり走っちゃったワケよ、光に向かってね。
身体が危険を求めたのか本能が好奇心に誘われたのか、んなこと俺はしらねー
ただ走っちゃたことは確かだよ。
どんどんまぶしくなっていくもん。
ここまできたら全力疾走だ。毒をくわばら皿までとかいうじゃねーか。それだよ。
とにかく全力疾走っ
俺はいまや自分の意思で危険に近づいている。
変な男だよな、俺も。
さっきとぜんぜん違うこと考えているぜ。やになっちまう。

そんなこんなのうちにめちゃくちゃまぶしくなっていく。
そしてまぶしい光の中俺は見た。
何をかというと・・・
女の子だ
ふつう、こうゆー場面で出てくる女の子は綺麗でか細くて倒れているってもんだろ。
綺麗か、などはまぶしくてわからんが、その子は、しっかり二本の足で立っているくっそー王子様風に「大丈夫ですか？」とか言いながら抱き起こしてみたかったぜ。
まあ、そんなことはほっといて。
「・・・」
無言、双方が。最初に口を開いたのは女のほうだ。
「この森で人に会うのは久しぶりだ」
そりゃそうだろ。三日もさ迷い歩いているのに人っ子ひとり見かけねぇ。だから
「俺も人に会うのは久しぶりな気がするぜ」
って言ってやったね。そしたらその女フフンと鼻で笑いやがった。
「当たり前だ。ここは『魔の森』人は恐れて入ってこん」
「なんてこった！んな危ない場所にのこのこ入っちまったわけか！いますぐ出よう・・・って、出られないんだったーーー！！」
女がまた鼻で笑った。
「おかしなやつだ」
「よけーなお世話でい！」
「そうか。助けてやろうと思ったが、余計なお世話か」
普通はここで手のひら返して頼むのが筋だろう。俺が筋の通った人間に見えるか？見えるって奴は俺のことを勘違いしているな。
「案内して、その料金がっぽり貰おうって魂胆か？」
「おまえのような貧乏人にどんな料金が払えるというのか？」
俺も俺なら女も女だぜ。口がうまいとゆーか、敵を作りやすいとゆーか。ま、損な性格だよ。

「おまえは面白いな」
女が言った。うるせー。よく「おまえはひとり漫才が得意だな」とか人に言われるけどなりたくて面白い奴になったんじゃねーよ。ついでにひとり漫才は特技じゃねーぞ。俺は深緑の髪に同じ色の目をして、ミニワンピース着てニーソはいてる、「ないすばでい」のねーちゃんをにらむ様にして見た。
ん？そういや光が消えてる？
「さっきの光はなんだったんだ？」
俺は独り言のようにつぶやいた。すると女が
「光が消えたことにきづいていなかったのか？あれは私の技だ」
「おまえの？光技が使える奴は珍しいんだろ」
魔法に無知の俺も聞いたことがある。伝説の光使いの話。確か・・・
「１０００年にひとり生まれる、だそうだ」
「んな、人事みたいに・・・自分のことだろ？」
「まあ、よいではないか」
ああ。おまえのことなんかどーでもいいぜ。
「私はこの森をめったに出ない。森の外は広いのだろう？」
いきなり何聞くんだコイツは
「当たり前だろ」
「さっき森の外に連れて行く料金の話をしただろう」
「ああ」
俺が振ったんだからさすがに覚えてるよ。
「森の外につれていってやろう。代金は少しの間だけでもいい、いっしょに旅をさせてほしい」
「交換条件か？」
「代金だ」
俺は少し考えた。メリットは色々ある。たとえば森から出られること、これが大きい。そしてデメリットは？まず他人にあわせた行動、俺はこれがとても苦手だ。ただし今回の場合少しでいいらしい。森から出るためにはこれしかない。

「いいぜ。ただし絶対森の外につれてけよ。絶対だぞ」
「それは約束しよう」
女は言った・・・・って。
「名前きーてねーな」
「おまえの名前も聞いてないな・・・わたしはパール・レフージュだ。よろしく頼もう」
「ん。俺はソラス・エイプリル」
俺は簡潔に名のった。
「四月、だな」
「し・・・四月」
今日俺についた新しいあだ名＝四月
もういいやって気分です。

てことで現地の人に助けてもらった俺。
無事に森の外まで出てこられた。いかった、いかった（よかった）。
その矢先である。あのどこから出してるのかわからん高笑いが聞こえたのは。
「オーホッホッホッホーーーーー」
見上げた木の上に誰かいる。あんな高笑いして・・・
「煙とナントヤラは高いところが好きだというのは本当だな・・・四月」
「四月じゃねー」
すかさず突っ込み。入れないとこれから後どうなるかわかったもんじゃねぇ。
「まあ、あたくしを無視するおつもり？」
高笑い女が言った。年は俺たちと同じぐらいだろう。長く紅い髪を結い上げてる。
ご苦労なことにこんな森の中に着物風の服（歓楽街で夜会う方）でご登場だ。
「とう！！」

なんで飛び降りるために木にのぼんだろ？つーかあの格好で木登りかー。
女はすたりと降り立つ。着物のすそ大きくめくれていた。
「あたくしはアンジュラル・バーミリオン。光の方を倒しに参りましたの」
こっそり暗殺せいや、と思っている横でパールは何かを考えていた。
なんだ？心当たりでもあるのか？
パールがポンと手をうった。女に指を指して
「あんず」
歓楽街着物女＝あんず
「あんず・・・ですって・・・？」
「おまえのあだ名は今日からあんず。」
ボーゼンとしているあんず（笑）。おれはにやりと笑いつつ言ってやった。
「じゃ、よろしくあんず。じゃあ行くか・・・真珠」
「ん」
パールの奴は真珠でいいらしい。これも決定だな。
光使いの女＝真珠（ないすばでい）
「じゃあな、あんず」
「ばいばい、あんず」
俺と真珠はその場を去ろうとする。
「おまちなさい！！」
振り返るとわなわなと振るえたあんずが立っていた。
「あたくしを無視して・・・・あんずなんて・・・・こんな屈辱初めてですわ！」
恥じる心があるならばまず服をどうにかしろって歓楽街。
「尋常に勝負しなさい！」
俺はにへらと笑った。ここんとこ身体を動かしてなかったんだよな。
いろんな意味で。
「うっしゃー！その喧嘩、俺が買ったー！！」

高らかに宣言
「いいですわ・・・勝負っ」
俺はすらりと剣を抜く。かまえる。
相手は魔法使い。なにが出てくるかわからん。
相手の出方を待つ俺。相手は色鉛筆を取り出した。なげるのか？
赤の色鉛筆を動かす。突然飛んでくる何かを紙一重でよける。さっきまでいた場所が燃え上がった。
「色使いか！」
「そうよ。赤は炎の色。あたくしの色に染まりなさい。オーホッホッホッホーーーーー」
相手が高笑いをしている間に俺の考えはまとまった。魔法使いの欠点、接近戦に弱いこと（たまに強い奴もいるが）そこをつく。
俺が走り出したのを見て相手も高笑いを止めて攻撃に移ってきやがった。
紙一重でよける俺。かっこいい！
そしてあんずに近寄りしゃがみこむ。いきなり視界から消えた俺をあんずは探す。そして俺はあんずの目の前に現れる。あのびびった顔、見せてやりたいぜ。そして俺は最後の動作に入る。最強の攻撃。
あんずのあごに手を当て顔を上げさす。
そして俺はかっこよく笑う。
「お前には戦いなんて似合わないぜ。」
開いているほうの手で相手の唇をなでる。
「～～～～～」
あんずは声も出ない。服装だけだったか歓楽街。
「お・・・・・覚えてらっしゃいっ」
緑の色鉛筆を振り、風とともにあんずは消えていった。

「どういう頭なのだ？」
真珠が俺に向かっていった。
「だってあんな夜の歓楽街風の格好してたら男ならそうするって」

あんまり自信がないが。
「・・・かんらくがいってなに？」
その言葉に俺は固まる。
もしかして
物凄く世間知らずを連れてる？？
先が思いやられるぜ・・・。

Partner ligght2

大きな草原
一面の緑が太陽に光によって輝く
青々としたそれは
ついさっきまで

Partner ligght#2

そこが湖だったことを
誰にも信じさせない
突如として消えた蒼
突如として現れた青
それは蜃気楼か幻か
それとも
それが事実か
もうわからない

「・・・ここは・・・ここはどこなんだ～！！」
俺の絶叫が響き渡った。
森を抜けて、高笑い女を回避し、出たところは見たこともない青々とした草原だった。
ああ、一面の緑。ふわふわだーって、そんな場合じゃねぇ。
何でこんなところに草原？！俺の記憶ではここは湖・・・
「真珠、町への行き方わかるか？」
フルフルと首を振る真珠。てことは・・・
「森を抜けても迷子のまんま？！」
俺は絶望したね。やっとあのわけわかんねー森を抜けたってーのにまた迷子かよ、オイオイ。

前方を見渡す。
皆さん、右手に見えるのが地平線でございます、ってか～。冗談じゃねぇ！俺はちゃっちゃと町にいきてーんだよ。誰か～俺を助けて～。
ここまできて俺は思った。俺ってもしかして方向音痴？
いや、そんなわけねぇ。今まで俺は一人で旅をしてきたが、道に迷った記憶なんてほとんどない。覚えてないだけかもしれねーが。
とにかく。このあたりには何か変なモノがあるのかもしれない。率直に現地の人に聞いてみよう。
「おい真珠、このあたりは方向がわからなくなる魔法でもかけてあんのか？」
「しらん」
「あっさりと答えるな・・・」
現地の人に聴いてもわからんとは・・・どーする、俺。
「・・・とりあえず、歩くか・・・」
仕方ないからほとほとと歩き出す俺、の後についてくる真珠。これからどうしよう・・・
ほとほと
ほとほとほと
ほとほとほとほと
ほとほとほとほとほ
ああ、夕日が綺麗だ。あれに見えるは・・・
「街だ・・・」
意外なところに街。ラッキー。
「真珠、日が暮れるまでに街に入るぞ」
そう言うが早いか俺は走り出した。真珠も後ろについてくる。
でやぁぁぁぁぁぁぁ
「そこの門閉るのストーップっ」
そして猛ダッシュ！！
「入国・・・希望です」
こうして何とか野宿は免れたのであった。

街に入ると真珠はすぐに宿へ向かった。俺は・・・酒場に直行だぜい！
俺のざるっぷりを見せてやらあ。
勢いよくドアを開けて
「あーーーおまえはっ」「あーーーあなたはっ」
入ったとたん俺は叫んでしまった、と同時に向こうも叫んだ。そしてまた二人同時に。
「あのときの！」
相手を指差した直後に
「お客さん、静かにしていただけませんか？」
酒場の親父に怒られた。
そこに、その舞台の上にいた女はあんず・・・本名アンジュラル・バーミリオンだった
この前のときと違う柄の着物を同じ着方をしていた。
周りからはよった親父どものはやし立てる声が聞こえる。
あんずは固まったままだった。
俺は愛想笑いをしながら酒場を後にした。そして裏路地に入る。
「ちょっとそこのあなた！」
大きな声で呼び止められた。この時間に近所迷惑だっつーの。
「なんだよ」
「あなたは・・・あのときの・・屈辱の・・・」
言葉つながってね一ぞ、あんず。無視して立ち去ろうかな～
「責任とってよ！」
ぽろぽろなきながらあんずはいった。そんなに悪いことしたかなあ？素直に聞いてみよう。
「俺そんな悪い事したか？」
「だって・・・だってあんなことされたの始めてだったのですもの！しかもあなた・・結構カッコいいから・・・」
最初は勢いよく、最後はちょっとにごらせながら言った。そうか俺はかっこいいのか・・・やったね。それはいいけど責任なんて何し

ろってんだよ。
「で、どう責任とってほしいわけ？」
「あたくしの恋人になりなさい！」
・・・何言ってんだ、この女？俺が口を開こうとしたとたん。
「いいわよね、あんなことしたのですもの」
なんか反論できねえなあ。
「それは・・わかった。でもそっちの身分を教えてもらわないとな。なぜ真珠を襲ったんだ？」
まあこれだけはきかないと大きなトラブルになりそうだぜ。一応、念のため、絶対事項で最優先事項だ。まともな答えがくるといいなあ。
「あの子は・・滅するべきですわ」
「・・・なんでだよ」
「いつもそうよ。光使いが出てくるたびに世界は混沌とするわ。もっと早めに滅するべきだったのです。だけどあの森のせいでそれもできなかったわ。誰かが連れ出してくれるのを待っていたのよ。ずっと、ずっ・・・」
「ふざけるなよ・・・。」
あんずの言葉の途中で俺は怒鳴った。
「あいつが生まれてきたのが悪いのか？人が生まれてきたことに対しておまえは文句をつけるのか？」
「だってあの子は破滅をもたらすのよ！」
「それは過去の話だろう！あいつじゃない！」
「でも！」
「でも私は破滅の女神の化身だ」
俺は振り返った。そこには街明かりに照らされた光使い、パール・レフージュがいた。
「確かに私は破壊の女神の化身だ。わかっている、わかっていて森を出た。親が残してくれた結界を出た。すべて、わかっている」
俺たちに近づきながら、一歩一歩重みのある歩みで近づきながら、

しっかりとした口調淡々とで言う。すべてを悟ったものの言葉は力強く重い。誰も動かさせない気迫、何も言わせない視線。金縛りにあったような時まで固めたような藍の光。冷酷な眼差し、冷たい声。
「私の一生は私が決めるのだ。もう何者にも邪魔はさせん」
声という名の空気の振動をこれほど感じるのか？それともこれは光の振動か？もう俺にはわからない、わかれない、わかってはいけない。そこは破壊の女神のテリトリー。
「何者が来ようと私はすべてをはね返す、破壊する。私は我侭な、すべての神をおとしいれた、破壊の女神の化身だ」
深緑の女は目の前の紅い女を真っ向から見据える。
紅い女は深緑の女から視線をずらそうとするがずらせない。
しばらく何も動かない時が続いた。
深緑の女がふいに笑った。意地悪くもなく声もしない。
破壊の女神の無邪気な笑い。
すべてを破壊するかのように。
ソレガカノジョノツヨサナノカ・・・

穏やかな朝
昨日の今日なのに、何だったんだあれは。
破壊の女神の話は聞いたことがある。別名デザエアーとよばれたすべてを破壊する美しき女神。そんなものは存在しないと思っていた。
実際はどうなのか俺ではわからん。
わからないことをうだうだ考えるのはおれの主義じゃない。真珠が本当に破壊の女神だったとしても、くるときはくる、なるときはなる。そのときに考えよう。お気楽どうまっしぐらだー。
「よし！」
宿の腰掛けていたベッドから勢いよく立ち上がる。
窓から外が見える。こぎれいな町並みだ。なんかふつー。何にもおかしなところはない。なのに見たときにぞっくとした。いやな予感がするぜ。

そう思いながら真珠がいるだろう食堂に降りた。
「おまえ・・いるんだ」
そこで見たものは朝食と真珠とあんずだった。って変な書き方。あんずは食いもんの方じゃねーぞ。あの着物女だよ。
「ええ、この子を殺せないなら破壊させないだけですわ。あたくしは元から破壊を止めることが目的だったのですもの。どこまでもついていきますわ」
「うへー」
おれはあからさまにいやそうな声を出しておいた。ちょっと前までのひとりで旅してたころが懐かしいぜ。
「あんずは結構良い奴だ。いっしょにいて良い」
「・・昨日あんなことがあったばっかりなのによく『イイヤツ』なんて言えるな」
「直感だ」
真珠はそれだけ答えた。コイツは結構頑固だからな。
「しゃーねぇ、トラブルだけは起こすなよ」
それだけ言っておいた。言っても無駄な気もするが。
「とりあえずこれからどうする？なんかいやな予感がするからすぐに出るつもりなんだが」
あんずが驚いた表情で俺を見た。変なこと言ったか？
「あなたも感じましたの？この自然の中の不自然を」
「なんか文章おかしいぞ」
関係のないツッコミを入れてみたが
「私も感じた。すぐ街を出るように言おうと思ったところだ」
ああ、むなし。流されちまったよ。いじけてやろうかな～
「ということで買い物をしてすぐにここを出るぞ」
勝手に話が進んでいたのであった。
とりあえず各自買うものの分担を決め宿から出た。
街をぶらぶら歩きながら様子を見る。やっぱり何も変わったところなんてねえ。でも何かがおかしい。それがなんなのか見極めようと

しっかりと見ていく。
やっぱ、なんもおかしくねえよな。しゃあない目当てのもんは買ったし、帰るか。
そのとき俺は自分の目を疑ったね。暑くもないのに陽炎がみえた。
何かがおかしい、この街は。
宿の前に戻ると二人ともういた。俺はさっきから感じていた直感ですぐに離れることを決めていた。すぐに走り出しながら言った。
「すぐに、すぐに街を出るぞ！」
「え？待ちなさい～」
あんずが何か言っていたが俺は止まらなかった。
「説明してほしい」
真珠が冷静に言った。
「なんかいやな予感がするんだ。なにかが・・・」
俺も文章になってねえな・・・。
真珠もあんずも後ろをついてくる。
街の外はまた一面の草原。街を出てもいやな感じは続く。来た方向と逆へと走る。
「つかれた・・・やすまして・・・」
途中で体力のないあんずが休憩を要求。賛成して少しの間だけ休んだ。
日が沈むころ草原が終わり茶色の土が見えた。いやな感じも消えた。
「ここで休むぞ」
言いながら振り返る。あの草原は。
湖だった、蒼の湖。俺がここにあることを知ってた湖。
「・・・」
「どうしたんだ・・あっ・・・」
真珠も気づき、続いてあんずも。
「街は・・？」
「さあな、湖の底かほかの場所か、それとも蜃気楼だったのか。もうわかんねえぜ」

「あのままいたら死んでたかもな」
真珠が言いながら湖を眺める。
蒼い湖は半分以上沈んだ夕日によって山吹色に染まっていた。
もう知る術はない。

Partner light3

大きな街
大きな二つの勢力
どちらが正しいのかなど
誰も答える術を持たない

Partner light #3

何が正しいかなど
個人が決めること
決め兼ねたものには
他人による勧誘の的
人に流されるな自分を高く持て
それは
正しいのか
正しくないのか

「はーはっはっは」
俺は勝ち誇ったように笑った。後ろで小さな声で俺の悪口を言った真珠も今日は許してやるぜ。はっはっはー笑いが止まれねえ！！
でっかい街に入った俺らは酒場に直行したのである、もちろん俺の意見によって。そこで博打をしかけられたのだ。もちろん乗らない俺様じゃねえぜ。そしてもちろん大勝利中。
「俺に勝とーなんざ１００年早いぜ！」
「くそう。コイツまじめにつえええぞ」
ギャラリーが賑やかになってきたぜ
「もう一勝負っ」「旅人の方おやめください！！」
後ろから大きな少女の声がかかった。同時にさっきまで博打をして

いた兄ちゃんが逃げていく。
「ここでの博打は『くればあ教』がゆるしません」
「くればあ？なんだよそら？」
俺は首だけまわしてきいた。白い服の少女は楽しそうに答える。
「『くればあ教』とは人々の生活は質素で緩やかに平等に進むべきだという考え方です。神は人の上に人を作りません。私たちが神を信じた分だけ神は私たちを救ってくれます。がんばって働いた分だけ幸せをくれます。神は必ず見返りをくれるのです。もっと質素にまじめに生きましょう。さあ、賭博なんかやめて」
・・・俺の中でコイツは変な奴と決定しました。なんかおかしくねえか？
「『神を信じた分だけ救ってくれる』神様ってのは損なやくだねえ」
「そんなことありません。神はひとの道を切り開いてくれるのですよ」
その諭すような言い方はきらいや。
「『神は見返りをくれる』神自信は見返りを貰ってないじゃん」
「・・・」
お、だまった。
「いくぞ真珠、あんず。こんなとこ、もういる意味がねえからな」
「そうだな」「そうね」
ドアノブに手をかける。
「まってください！」
さっきの少女が大声で言う。
「私では役不足でした！教祖様に会ってください！どうか！」
俺たち3人は顔を見合わせた。そして同時にあきらめたようにため息をついた。
「わかったよ。教祖様とやらのところに連れっててくれ」
教会は街の外れだった。そこまで歩かされた。これでつまらん話だったとしたら暴れてやろう。
「教祖様、お客様です」

こぎれいな教会
昔っからカミサマなんてものは信じていなかった。信じるだけで救われるはずなどないのだから。現実なんてそんなもんだ。
「神、か。いいかげんなものだな」
隣で真珠が小さくつぶやいた。
「おやおや、旅の方ではありませんか。わたしは『くればあ教』の教祖です」
肥えたおじさんが出てきて言った。何が『おやおや』だよ。
「『くればあ教』に関心を持たれたのですか？」
「いんや、そこのガキがひっぱて来たんだよ」
素直に俺は答えた。
「そうだったのですか。この子は熱心な子でね、少しやり過ぎてしまうことが多いんだよ。許してやってほしい」
そのとき俺は見た。じろりと少女を見る教祖を、見られて身をこわばらせる少女を。
「まあとにかく『くればあ教』というのは・・・・・・」
そして少女と同じ内容を話していった。
・・・
「だあー。もう夜じゃねえか～」
外は暗闇だった。あんのじじい
「とりあえず宿に帰りましょう」
あんずが言った。真珠は賛成した、俺は、
「ちょっと用事ができたから」
そう言って逆へと歩き出した。どうも昼間のあの二人の行動と言うか対応というかが気になったのだ。
そっと教会に忍び込む。天井裏になんとか入った。音しかない世界。
「だめじゃないか、旅の方に迷惑をかけたら」
「ご・・ごめん・・なさい」
「自分ひとりで勧誘して見せなさい。この国ではそうなっているだろう」

「はうっ。ごめんなさい」
「『ガムドリンク教』の奴らに取られたらどうするんだ」
「ごっ・・ごめんなさ・・い」
教祖の声、そのあとの少女の苦しそうな声。そのやり取りがだいぶ続いた。そして教祖が去り静かになった。後に残るのは苦しそうな少女の呼吸。俺は下へ降りた。
そして無残な少女の姿を見た。その少女は笑いながら言った。
「来てくれると思っていました。そう、これが『くればあ教』の新の姿。だからどうか旅の方、北の宗教『ガムドリンク教』へ入ってくださいね」
「おまえは『ガムドリンク教』って方の信者なのか？」
「はい」
少女は哀れな姿で無邪気に笑った。
「『ガムドリンク教』の神様は人を救おうなどと考えておりません。自由できっとあなたにあう神様ですわ。北の教会に一度お越しください。まっています」
またにっこりと笑った。

「てことだったんだ」
朝食の席で昨日の晩のことを二人に話した。
「確かに何か隠しているように見えましたわね」
あんずは納得したようにうなずいた。その隣で真珠も。
「だからとりあえず北の教会に行ってみようと思う」
「わかった。面白そうだからついていくぞ」
結局三人で行動か・・・
北の教会ってのは町のはずれにあった。回りで朝から博打に興じる人がたくさんいた。そいつらを無視して俺たちは教会に入る。
「いらっしゃいませ。女の子から話は聞いておりますわ」
入ったとたん綺麗なねーちゃんが言った。
「私は『ガムドリンク教』の教祖です。ようこそ北の教会へ」

「その『ガムドリンク教』ってのはどんなんなんだ？」
「ようこそきいて下さいました。『ガムドリンク教』とは、人間が人間らしく人間臭く生きることを決まりとしています。やりたいときにやりたいことをやる、やりたくなければ何もしない。考えることに詰まってしまったら何も考えずとりあえず本能に従え。不可能なことは不可能なのだからあきらめろ。私たちの神はしつこいことがお嫌いです。だからできないことはできない、それが当たり前だと言ってくれますし、それを許してくれます。ね、自由な神様でしょう」
女がとても誇らしそうにそう言った。
「じゃあおまえらは自分にできないことはすぐにあきらめるのか？」
「そうです。無理をしてはいけません」
この言葉もまた誇らしげに言う。なんかなー
「俺はここもあわなそうだ」
「なぜですか？」
「俺はあきらめが悪いのさ。んな挫折するばっかりの人生お断りだぜ」
斜め後ろで真珠がうなずくのが見えた。おまえも賛成してくれるか。ひとりだけじゃないってなんかうれしいなあ。
「てことで、じゃあな」
それだけ言って教会を出た。
「ここは不思議な宗教がありますわね」
道を歩いてるときにあんずが言った。きちんと並んだ石畳の道。普通の街。
「俺たちの感覚がおかしいのかもしれねーぜ」
ここの人たちが普通なのか俺たちがおかしいのかなんてわかんねーよ。この街で普通なこともほかではおかしいかもしれねえ。すべてを知ってる奴なんていねーよ、たとえ神とやらでもな。
「この二つ以外に何か宗教はあるのかな」
真珠がぼそっとつぶやいた。

「ありませんぜ」
右側からの声に俺は驚いてそこにある暗い路地を見た。一人の男が顔を出している。
「ここには『くればあ教』と『ガムドリンク教』しかありませんぜ。そのどっちにも入っていない俺らは『無教徒』、裏路地の悪魔ですぜ」
かっこつけて言ったがあまりかっこよくない。本人は可哀想な事にそれに気づいていないみたいで、同じように続ける。
「俺たち『無教徒』はどちらもの裏の顔を知っていますぜ。汚い顔をね」
「例えば？」
表情を変えず真珠がきいた。
「例えば『くればあ教』、あそこの教祖は人に言えないような人間臭い事をしている。例えば『ガムドリンク教』あそこの教祖は何もあきらめず教徒から取った金で大もうけをしている」
にやりと笑いながら男は言ったが、かっこよくないって。
「そうなの。『くればあ教』の話は聞いていたけど『ガムドリンク教』の話は知らなかったですわ」
「とりあえず『無教徒』の楽園にきてくだせい。色々教えることができますから・・・」
男の後ろについてどんどん街の奥深くまで歩いていく。薄暗いし汚いし嫌いだなあココ。
「ここですぜ」
そこは簡易な教会だった。そこに男女あわせて３０人ほどの人がいた。
ここまで連れてきた男が俺たちのことを紹介すると人々は例の二つの宗教の話をしていく。二人の教祖は汚い私欲のためにその宗教を作ったことがわかっていく。
そして昔はもっとたくさんの宗教があったことも。それらは吸収されたり消えていったりで、今は二つになったらしい。

俺は『無教徒』とやらに最初っから思っていた質問をふっかけた。
「おまえらはこんな暗い裏路地にしかいれないのか」
「そうだ。表に出れば二つの教徒の勧誘と迫害の嵐。ここしか私たちの居場所はない」
だそうだ。俺は決めたね。こんな街早めに出よう。こっちが腐りそうだ。
「俺は二つの宗教どちらも嫌いだ。そして表の光のある場所に立てないここも」
「確かに。ここもなんともつまらん場所だ」
「周りに流されないことは大切ですわ」
唖然とする『無宗教』の奴らそれを尻目に俺たちはここを出て行く。
どうせ俺は旅から旅の根無し草よ。
自分の居場所は自分自身で勝ち取るさ。
変な宗教に頼って自分の人生を捨てる気なんて俺にはねえぜ。
「あばよ。変な街」
「次はどこにたどり着くのか？」
真珠が聞いてきた。
「あいつらの神様じゃあ絶対にわかりっこねえな。」
当たり前のように俺にも。
だれにも

Partner light4

この世界は
とてもとても不思議だ
たくさんの生き物が
必死になって

Partner light #4

一生を
一日を
一刻を
生きている
不思議な力が
満たされ
まわる
摩訶不思議なこの世

エルフだそうだ。
耳の長い、ってもウサギじゃねーぞ。神秘的で美しい種族だそうだ。
俺は合ったことねえからしらねーけど、そいつらを見たことがある
奴らは口をそろえてこう言う「あれは幻だったのかもしれない」と。
ん何すごいもんなら一生に一度は見てみたいじゃねえか。見る機会は
「今しかねえ！もがっ」
「ああ、そうだな。とりあえず静かにしろ」
俺が大声出したとたんに真珠が口を押さえる。
またもや俺は森の中にいる。今回は迷子ではない。この森は通り道
なのだ。先ほど出てきた町から次の街まではこの森を通るしか道は
なく。

そしてここは神秘的な生き物の住処だ。
もがもがと騒ごうとする俺の口を押さえたまま真珠は立ち止まる。
「真珠さん、どうかしましたの？」
あんずが振り向きながら真珠に問いかける。真珠は森の奥のほうを見ながら唇に人差し指を当てる。静かにしろ、らしい。
真珠のこういう事に対する感は結構当てになる。森で暮らしてた人ってすげー。
あんずもそのことに気付いたらしく口を閉じる。
しばらくの間そのままだった。
すっと真珠が俺の口から手を離す。
「・・・行った」
「行ったて何がだよ？」
真珠はゆっくりとさっきまで見ていたところを指す。俺とあんずもそこを見る。
「人ではない、人型のもがそこを通った」
「エルフか？！」
俺はじっとそこを見る。そこには誰もいない。
「フェアリーですの？確かにこの森にはフェアリーもいたはずですが」
真珠を見ながらあんずが言った。フェアリーを見たものは幸せな気持ちになれるらしい。見りゃよかったぜ・・・そんなこんな考えてるとまた真珠が口を開いた。
「ちがう。ゴブリンだ」
『・・・』
ちなみにゴブリンとは醜い魔物である。
「むしろ見なくてよかったと思っていますわ・・・」
「同感だ・・・」
あんずのつぶやきに俺は答える。きっとうんざりとした声だったであろう。
「・・・おまえたちにとってはゴブリンなど雑魚だろう？」

俺たちがうんざりしているのを見ながら真珠は不思議そうに言った。
「雑魚だからこそ戦いたくねえんだよ」
あんずがこくこくと頷いているのが見えた。
ちなみにこの森には旅人が通りやすくすために魔物の力を封じる結界とやらがあるらしい。これで戦わなくてすむぜ。
「・・ああ」
真珠はぽむと手を叩き、つづける。
「最近、動物愛護団体が賑やかに動いているからか？」
「・・・あれは愛護すべき動物に見えるか？」
「ねずみですら愛護する時代であろう？そういうのも愛護しているのかもしれんぞ」
ねずみのほうが、ずっとましだって。
俺は深く溜め息をついた。それを見ながら真珠が言った言葉は
「急がんと日が暮れるぞ」
だった。

「結局もう夜じゃないですの！」
西日が入り込んでくる森はもう十分暗かった。
「街を昼から出たのが間違いだって」
きつい口調で怒っているあんずをなだめる真珠の横で俺はつぶやいた。
「そんなことといまさら言ってももう遅いぞ、四月」
「わかてるよ・・・」
もともとこの森は1日では抜けられないから途中に休憩場があるはずだったらしい。そこまでもつけず今日の日は完全に落ちたのであった。
あんずはキッと俺をにらみつける。
「・・・野宿ですの？」
「今から歩くか？」
暗い森を歩く恐ろしさはあんずも知っているだろう。ついでに俺は

この前の『魔の森』でいやと言うほど味わった。方角はいまいちわからないし、魔物は出てくるしで大変だった。魔物というやつは夜活発になり、火には寄ってこないものである。
「野宿ですか・・・」
「私は野宿が好きだぞ」
真珠はさっさと荷物おろしている。
「森育ちだからな、おまえ」
俺も荷物を下ろす。つづいてあんずも。

この世界には魔法というものが存在している。
目の前で壜から出て明るく光るものもそのひとつである。マジックアイテムと呼ばれるそれは壜に魔法がかけられており、壜の口に火を近づけると燃えつづけるという代物である。
他にも見た目よりたくさんの物が入る革袋などがある。
その火で茶を沸かし、携帯食料を食べる。このあたりの旅人はみんなそういう手を使う。
事件が起きたのは、明日の朝は早く起きるからと言って早めの時間に火をつけたまま寝て、だいぶたったときだった。
「・・・四月、あんず」
真珠が小さく俺とあんずを呼んだ。俺も気がついていた、そのかすかでしかないが確かな殺気には。
俺は抱え込んでいた剣の柄に手を伸ばした。いつも野宿のときはすぐに反応できるように剣を抱え込んだまま寝る。
殺気の持ち主が近づいてきているのがわかる。真珠は戦いに使う光を都合よく集めるための玉を、あんずは色鉛筆を、俺はクレイモアの柄をぎゅっと握る。
そして静かに立ち上がり構える。
そこに出てきたのは醜い姿をした魔物達であった。
「火を焚いているのになんで?!」
あんずが確かめるために後ろを振り返る。

その間も俺はシースから抜き放った鉄の刃を魔物達へと向ける。
「・・・新月か！」
真珠がちゃきりと光で作られた弓を構えつつ言った。
「ちぃ！暦なんて気にしてなかったぜ！」
新月の夜の魔物は危険。知っている人は少ないらしい。実際あんずはわかっていないようだった。
「新月の夜というのは魔物の力が増すとき、うかれて物を壊し、人を喰う」
「ということは・・・」
「雑魚も突っかかってくるんだよ！」
その雑魚としか思えない魔物達が俺達めがけて爪を振り下ろす。しかしそれにはあまりスピードも鋭さも無く力だけだった。俺は冷静に右によけその爪の持ち主の首を薙ぐ。
ちらりと横を見ると真珠は光の矢で、あんずは手にした緑色の色鉛筆から発せられた風によって魔物達と戦っていた。
真後ろからの拳を俺は華麗にかわす。さっきまでいた場所を黒いこぶしが通過する。そこに交わって茶色いこぶしが俺が避けたほうと逆から飛ぶ。
「みえみえだ！」
茶色いほうにも剣が届くため、確実に2匹ともの首を取れるよう集中して剣を横にふりきる。
とたん斧が横から飛んでくる。俺は身をそらしぎりぎりでよける。
「くそっ！数が多い！！」
俺ははき捨てるように言った。雑魚も多いと厄介な相手となる。
「四月！こっちだ！！」
真珠の声がする。俺は相手していた奴を切り倒し真珠の声がするほうへと走った。
「走れ」
そっちに俺が走るのを見てそこにいた真珠とあんずも走り出す。すぐに俺は追いついた。

「どうするんだ」
俺が真珠に問いかけると真珠は無言で右手をもといた場所、魔物達がうろつくほうへと差出す。
「光よ！」
真珠の右手から光球が飛び出す。それは魔物達を直撃した。
「走れ。ただの目くらましにすぎん」
俺達は走りつづける。

走りつづけた先にあったのは争った跡が大量に残る、無残な、生きた人のいない、宿であった。
「こんなになるなんて・・・」
ほうけたようにあんずがつぶやいた。
「魔物と言うのは、こんなに残酷なの？」
俺の服の袖をつかんであんずはつぶやくように言った。
「違う・・・」
「真珠？」
「奴らは浮かれているのだ」
「何に浮かれているのですの？」
「それは・・・」
真珠はわからないというように首を振る。
「そう言えば・・・」
俺が言葉を発し、真珠とあんずがこっちを見る。
「この森は旅人が通るために魔物の力を押さえてたんじゃねえか？」
「ああ、結界を使っていたらしいが」
不思議そうな顔で真珠は俺に答える。
「その結界のおかげで楽に通り抜けできるのですわよね」
あんずの問いに真珠は頷いていた。
「その結界がもしも崩れたら？」
「まさか・・・」
ふたりも気付いたらしい。

「結界が壊され、魔物達が本当の力を取り戻した・・・？」
「だから浮かれていたのか！」
重い空気が流れた。
「一刻も早くこの森を抜けたほうが良いですわ」
あんずが歩き出そうとする。
そしてすぐに。

「きゃぁぁぁ」

だれかの叫び声を聞いた。

Partner light5

安定とは
あまりにもろいもの
平和になれば
すぐに誰かが崩す

Partner light #5

誰とも言えぬ
誰かが
何もかも
崩し去ってしまう
強力な力は
忌み嫌われ
強力な力によって
崩され去る

「きゃぁぁぁぁ」
誰かの悲鳴が賑やかな夜の森に響く。女の子の声だった。
「いってみましょう」
あんずと真珠がそっちに向かって走り出す。
「森を抜けるんじゃなかったのかよ！」
走り出した二人を止めるように俺は声をかけたが。
「誰かが魔物に襲われているかもしれないのですよ！」
そう言って止まらなかった。しかたねえ、ついてくか。俺は二人の跡を追いかけすぐに追いついた。
「先に行ってください」
「へいへい」

仕方なく俺は先を急ぐ。
ふたりからもうだいぶ離れたと思う。
「こっちであってんだよな？」
かなり不安になって俺はぼそりとつぶやいた。だって違うとこだったりするとしゃれになんねーじゃん。
「！」
俺は剣のグリップに手をかけ後ろを振り返る。何かがいた気がした。耳をすます。聞こえてきたのは殺戮の音と下卑た声だった。
その方向に向かって俺は静かに、できるだけ音を立てないように歩み寄った。
見えた。
そこにいたのは何人かの男とそして耳の長い華奢な体つきの少女だった。
「覚悟しな、お嬢ちゃん」
男のひとりがそう言いながら手にした刃物をちらつかせた。そして少女は震える。やばいな。
俺は声をかける決心をした。
「その人数は大人気無いんじゃねえか」
俺の存在に気がつき男たちは俺のいるはずの場所を見た。しかしそこにはもう俺はいない。俺がいたのはエルフの少女の隣となっていた。
俺はクレイモアを抜く。それを見て男たちは俺に向かいなおす。
「兄ちゃん、こういう事に顔突っ込まないほうが良いぜ」
「そうだぜ。ま、もう遅いがな」
そして男たちは下卑た笑いを発する。
「雑魚ゴロツキがいい気になってるといたい目に会うぜ」
その俺の言葉を聞いて男たちは笑うことをやめ俺に向かって刃物を突き出す。
「雑魚だと！てめえ、殺してやる」
相手の刃物を剣で受け止めずつ俺は藍の髪を持つ少女に言う。

「そこを絶対動くなよ」
少女はこくんと頷いた
俺の剣が相手を少しだけ傷つけていく。心を持つ人間相手にはこれで十分なのだ。なぜなら
「・・・これは・・・心をきる剣！」
そう。俺が使う必殺技は心を切り相手の心理を揺るがし、殺戮をさせない剣なのだ。
「しばらく眠ってな」
男たちはごろごろと倒れていった。
「あなたは？」
おびえた目で少女は俺を見た。俺はしゃがみこみ少女に目線を会わせた。
「ソラス・エイプリル。敵になるつもりは無いよ」
それで信じてもらえるとは思わないが、俺はできるだけやさしく言った。
少女は眠っている男たちを見る。
「死んだの？」
少女は俺の服の裾をつかんで、おびえた目で言った。
「死んだわけじゃないよ。無理やり眠らしたんだ」
「よかった」
そのまま少女は目を閉じ、すとんと眠ってしまった。俺は少女をおぶり真珠とあんずがくるであろう方へと歩き出した。

ふたりとはなんとか合流できた。
「君名前は？」
「レンフォード。レンって呼んでください」
そいつは一向に俺の側を離れようとしなかった。ん？れんふぉーど？
「まさか男の子か？」
「はい。そうですけど？」
後ろのふたりを振り返る。二人も驚いていた。

俺達はそのレンの村へと向かっていた。最初に村が襲われたらしい。そしてそこにいた長老が殺されたとたん魔物達が強暴になったらしい。その長老が結界をはっていたという事らしい。
村の前まではこれた。ただ中に入るのは難しそうだった。
「そんな・・・」
正直、これほどまでになっているとは思わなかった。村を覆うのは生きたもののいないことをあらわす静けさと、魔物達の残した瘴気と、死人の残した瘴気と怨念だった。
俺は村へと走り出そうとするレンを止めた。
「放してください。・・・はなして！」
俺は首を横に振った。入ればそこに待つのは死か、狂気である。
「いやだ・・・」
レンは泣いていた。おれは何も言えなかった。多分、ダブらせてしまったのだ。俺の知るほかの少年を。その少年が泣き果てた末に出した答えの冷たさを。その道だけは選んでほしくない。
俺はレンをぎゅっと抱きしめていた。
「俺が選ばせない」
小さくつぶやいた俺の声にレンは気がつかなかったのかもしれない。
空が少し明るくなっているのが確認できた。

それは唐突に始まった
突然村は騒がしくなった
そして伝ってきた最初の恐ろしいことは
――長老が殺された――
皆になんとも言えない緊張が広がっていく
戦えるものは皆戦った
ここを渡すわけにはいかないのだ
一族の奥義が見つかってしまうから
世界を混沌の海へとまねき入れる
‘あれ’が

大人達の緊張は
最年少であった7歳にしかならないレンにも
掴み取れた
大人達は
子供を守ろうとし
必死になって戦った
そして
あいつらが来た

「やつらは、力を封じたぼく達を、怨んでいたんです」
レンは泣きながら少しずつ話していく。何があったのかを思い出すのはつらいことであった。
「だから総攻撃をかけたのか」
真珠の言葉にレンは頷いた。うつむいたまま、こくんと。
「ぼくは、村にいた、お姉さんと、森の外を向かって、逃げて」
その先はわかっていた。
俺達が聞いたのはその女の人の悲鳴。レンは必死になって走っていたが男たちに追いつかれて、俺がレンを助けた。その間に村は死んでしまっていたのだ。
俺はレンの肩に手を置いた。レンは俺の手を胸に持っていきそのまま泣いていた。

森の終点が見えていた。
レンが走り出す。
「ねえ、すっごく明るいよ！」
「レンは森の外に出たことが無かったのですの？」
あんずの質問にレンは頷いた。
あのあと急いで森をぬけることにしたのだ。かなり急いだのだが2日もかかってしまっている。その間にも魔物は出てきたがすぐに片付いた。

「ねえねえ、あの建物はなに？」
「あれは城壁だ。中に大きな街がある」
「まち？！」
早く行こうとしてレンは走り出そうとする。
イケナイ。
「レン。止まれ！」
「なに？」
真珠とあんずは何かおかしいと思ったのか、すぐにレンを止めた。
「・・・。誰だ！出て来い！！」
グリップに手をかけ俺が空に向かって大声で言った。
ばさばさと、鳥が羽ばたいていく。そして
「さすがですねぇ。えっと、いまは・・・ソラス・エイプリルでしたねぇ。その子は預けますよ、今は」
声だけが響いた。
俺はこの声を聞いたことがある気がした。
まだこの中の誰とも会っていない、遠い昔に。
誰だったかは
思い出せない。
いや
「思い出したくない・・・？」
いつのまにか俺はつぶやいていた。

Partner light6

普通
それは毎日のことであり
まったくありえないものですらある
誰が、誰が

Partner light #6

それを
中心と決めたのか
理由など
どこにでも
転がっている
石のようなもの
それで良いのか
善いのか

明るいでもどこか淋しい午後の光が部屋の中を照らしていた。
「ぼく」
藍の髪と長い耳を持つ、エルフの少年が顔を上げた。
「どうしたら良いのかわからないんです。でも」
「レン・・・」
「ぼく、なんであそこまで、村が壊滅するまで攻撃されたのかが知りたいんです。そして、」
俺はひとつだけ静かに頷く。このあとの言葉によっては・・・
「もう2度とそんな事があってはいけない。だから。いっしょに連れてってください」
「四月・・・」

あんずが俺を見た。わかっている。またひとつだけ俺は頷いた。
とたんにレンの瞳が明るく藍く輝いた。
「ありがとうございます。ソラスさん！」
「ソラス？」
おいおい真珠。まさか俺の名前忘れてたのか？
「おまえ、そんな名前だったのか？」
「べたなボケはやめい！」
「すいませんわ。あたくしも忘れておりましたわ」
えっと・・・
「もお良いよ。俺は‘四月’で決定してたんだな」
うんうんと真珠が頷き、あんずは控えめに頷いた。
「そういうおまえは私達の名前を覚えておるのか？」
うっ。痛いところを・・・。えっと真珠は・・・ぱ・・ぱー
「パール・レフージュ・・・」
驚いた顔をする真珠。やったね。あんずは・・
「・・・アンジュラル・シナバー（・・・・）」
ごす。と見事にあんずの肘撃ちが俺の腹にヒットした。
「アンジュラル・バーミリオン（・・・・・・）ですわ」
俺は腹を押さえる。まじに、いてーぞこれは。
「ごほっ・・・。すまん、なんか赤っぽい色だったところまでは覚えていたんだが・・」
「そんな変な覚え方してほしくありませんわ」
微笑みながらあんずが言った。
「ぷっ・・あはははは」
「れ・・レン？」
突然レンが笑い出した。大丈夫か？
「ああ。こんなに面白いのは久しぶりです。森ではこんなことなくって、平凡な毎日でしたから」
まだくすくすと笑いつづける。
「そんなに面白かったか？」

べたなボケのやり取りとしか思えないが・・・。俺はまだ腹を押さえたままだった。
「はい。新しいことはとても楽しいことみたいです」
レンの笑顔は心のそこから明るいようだった。

街を歩いていて武器屋の前を通りふと気になった。
「レンはどういう戦い方をするんだ？」
これは以外と大切なことだったりする。魔物と対峙するときなんかはそれぞれの特性を生かした戦い方をすることが大切である。これを忘れていると大変なことになる。
「普通魔法の水、氷と風が少し。専門は召喚ですけど」
「魔法使いか・・・」
この世界には『普通魔法』『召喚魔法』『奇跡魔法』『特殊魔法』の４つに分かれている。真珠、あんずのふたりは特殊魔法を得意としている。俺の『心を切る』のは奇跡魔法と分類されているらしい。それと俺は剣技ようの普通魔法が少し使える。
普通魔法は唱えるまえにその属性そのものに“自分に力を貸してくれ”という詠唱をいれなければならないため時間がかかるが一番あつかい使いやすい魔法なのでよく使われる。というか誰でもひとつぐらいは唱える事ができるだろう。
召喚は先にその呼び出すものと契約が無いといけないらしい。
んで、魔法使いの武器というと・・・実は何でもよかったりする。杖を持つ魔法使いが多いのは杖という形が魔力を増幅させやすいために、である。
「接近戦は苦手そうだな」
真珠がレンを見ながら言った。確かに苦手そうではある。
レンはこくんと頷いて
「後ろから援護するほうが得意ですよ。ぼくの呼ぶ生き物達は接近戦ができる子もいますけど」
「じゃあ、とりあえず援護ってことになりますわね」

俺、真珠は敵の近くまでよらないと攻撃があたらないタイプなのだ。光の術というのは射程の短いものも多い。あんずはどちらかと言うと離れていたほうがいい。色を使うときのモーションが大きいため、そこを狙われる可能性が高いのだ。
「で、どんな武器を使うのだ？」
「ショートソードの使い方は叩き込まれましたが、筋が悪いと言われましたよ」
筋が悪いって・・・。おそらくショートソードを渡されたのは体がまだ小さいためだろう。
「それで次からは金票を使っていました」
ヒョウ、それは投げて使う武器である。苦無によく似た形だが握りが無く後ろに小さな布がついていたりいなかったり。布の変わりにロープが付いてたりもする。
「とりあえず見てみるか」
俺はそう言って武器屋の中に入る。３人が後に続いてきた。
「何かお探しですか？」
中に入ると商売人らしそうなおっちゃんがいきなり聞いてきた。

結局、レンの武器として買ったのは普通の金票５本とロープのついた縄金票１本、もしも接近戦をしなければならない時のための苦無が１本とだった。
レンがしっかりとした手つきでそれを一緒に買った腰につけるホルダーへとしまっていた。
そのあいだ、俺はまた軽くなった財布を見つめる。
俺達、旅人にも金の問題と言うのは付きまとう。はっきりいって今までやってこれたのが不思議なくらいだったりする。今までの旅の出費は俺の財布から出ているのだ。
実は旅人の金儲けの方法はどの街でも転がっているものである。しゃあねえ、仕事すっか。
みんなの金だからみんなで稼ぐのは当たり前である。問題はどう誘

うかだ。
「金が無い」と素直に言っても良いのだが、そうするときっとレンが気にする。
「ねえ、四月。レンも交えて一回軽めのところで戦ってみたほうが良いんじゃないですの？」
そう言ってきたのはあんずだった。渡りに船とはこの事だぜ。ありがとうあんず！
「そうだな。傭兵ギルドにいってみるか」
そうね、といってあんずは城のほうへ歩き出す。傭兵ギルドはたいていそっちのほうにあるものなのだ。
「・・・すまん。‘ようへいぎるど’とはなんだ？」
・・・そういやこいつは最近森を出たばっかの世間知らずだったけ。
「ぼくもよくわからないんですけど・・」
こっちはレン。それに対してあんずは歩きながら答える。
「いいですか。傭兵ギルドというのは旅人たちに戦う仕事をくれるんですわ」
「なぜ戦うのだ？」
「街にとっては街をモンスターやごろつきから守るのためであり、旅人にとってはお金を得るためとなりますわね。結局お金が無いと旅は続けれませんもの」
「ふうん。わかった気がする」
「レンは？」
「なんとなく・・・。つまり、今から戦いに行くってことですよね」
「まあ、そうなりますわね」
そのままギルドに向かって歩きつづける。
大きな建物が見えてくる。その下の建物。
「あれが傭兵ギルドだ」
俺はその建物を指差した。
「で、」

「で？」
俺は笑みを浮かべつつどすを利かした声で聞き返した。
「おまえと、女二人と餓鬼で戦いにいくって？」
「そうだけど」
俺は笑みを崩さず言った。よく考えれば変なチームである事は確かだった。
「・・・・」
相手の表情からすると「やめとけ」と言いたいのだろう。
だが、はっきり言おう。このチームそんじょそこらのむさいチームよりだいぶ強いはずだ！ある意味最強に近いところにいる！！
「死ぬぞ～」
後ろからほかのチームの下卑た声が聞こえてくる。
「あいつらじゃスライムも倒せないんじゃないか？」
悪いが、スライムぐらい一般人でも倒せるぞ。
「ゴブリンが出たら気ィ失っちまうんじゃないか？」
ここにゴブリンを愛護する動物だと言った奴がいるが。
ムカムカしたまま後ろを振り返るとおびえたレンがいた。だがおびえる相手が間違ってる気がする。
レンは必死になって二人を止めているのだ。
そう、真珠とあんずを。しゃあない、俺も止めとくか。
「真珠、あんず。あんなあほの相手はするなよ」
その一言がいけなかったのかもしれない。ほかのチームの奴らが
「あほだと！」
どっかで見たような月並みの反応をして殴りかかってきたのである。
俺に向かって。
ばしゅ。たす
「四月、言葉の暴力はいかんぞ」
「あなたが最初に相手をしていますわよ」
俺の顔に最初の一撃をいれようとした俺よりごつい男のこぶしをつかんだまま、俺は「ああ、すまん」と軽く流す。

「はっ」
そして俺はその男に一本背負いをかける。
どす
男は床にたたきつけられる。
「・・・スピードと踏み込みの甘いパンチって楽に受けれるな・・」
男の動きは止まったままだった。
「スピードと踏み込みがあったらもっとかっこよく流れ技で倒せたのに」
相当悔しそうに言ってたのだろう。あんずが次に言った言葉は
「もう一回殴ってくれって、頼んでみたらどうですの？」
だった。
「いやもういい」
俺はカウンターの方へ向き直る。
「でさあ」
「ひっ」
そんなにびびらんでも・・・。まあこの人も俺らの事甘く見てたひとりだし。
「話し戻すけど」
「は、はいィ」
声ひっくりがえっとんぞー
「なんか、楽で金のたくさん入る仕事ナイ？」
「え、えっと～」
「楽なのを優先ね」
目の前のおっちゃんは急いで探している。
「四月」
「なんだ、あんず」
「それ脅しだ」
「まっ、良いじゃねーか」
たまには刺激も必要だって。
・・・たまにで良いけどなっ！

Partner light7

ずっと暖かい中で生きたかった
それが
全ての望みだった
生きることとは

Partner light #7

戦いなのか
死ぬ事とは
安らぎなのか
どうかやすらかな生を
そう祈りつづけては
いけませんか
返らない
声

「これで手配が終わりました」
びくびくしつつおっちゃんが言った。
手配というのは今回の仕事を引き受ける手配である。
「俺が言った通り、楽な仕事だよな」
「は、はい。それではデータボードを」
そう言われて俺はデータボードを差出す。
データボードとは魔法の道具に近いもので、この世界の冒険者なら誰でも持っているはずだ。その一つで時計、地図、自分の持ち物の確認、仕事内容の確認、そして情報をやり取りすることすら出来る、便利ものだ。普段は丸めといて使う時に広げる。太陽パネル付だという省エネ設計でもある。ま、エネルギーを作り出せる魔法使いに

とっては省エネとは必要の無いものだが。
「データをおとしました。それでは幸運を」
引きつった顔のおっちゃんに見送られつつ俺達はギルドを出た。
そのまま大きな道を歩く。
「お兄ちゃん」
レンが後ろから俺に声をかける。俺は後ろにふりむく。
「なんだ？」
レンは小走りに走ってきて俺と手をつなぐ。そして俺を見上げながら言った。
「このチームってそんなに変な組み合わせなの？」
はっきり言おう。かなり変だ！
いま世論で強いといわれるチーム（暁の星だったっけ）は戦士（男）３人、魔道士（男）１人、巫女（女）１人だったはずだ。
このあたりにはまだ余裕があるため子供は剣を取らなくてもやっていけるのだ。数年前はひどかったが。同じ理由で女の人も戦おうとしない。
その点から見るとこのチームはかなりおかしい事にもなる。どう見ても子供のレン、女の真珠とあんず、本来ならまだ親元にいるはずの年齢の俺。成人とみとめられるのは２０からである。
「このあたりだとな、まだ子供は武器を取らなくてもやっていけるはずなんだよ」
「治安がいいんだね」
感心したようにレンが言った。
だがレンを見てわかるように、極たまに子供でも武器を取り歩き続けなければ生きていけない例もあるのだ。主に親が亡くなった場合など家族関係の問題だが。
俺は裏路地を指した。
「本当に治安が良いか見に行こう、レン」
「ちょっと、四月！」
呼び止めようとするあんずを無視して俺とレンは裏路地に入る。真

珠と、あんずも仕方ないと思ったのかついてくる。
しばらく歩いてから立ち止まる。
「うあ・・・」
レンの口から声が漏れる。
「これが、真実だよ」
そこにいるのは布を1枚羽織っただけの子供たちだった。歳はレンと同じぐらいだった。
「治安が良いのなんて表だけですわ」
あきらめ顔のあんずがそうはきすてた。
「・・・」
レンは黙ったままだった。
「戦の被害を受けるのはいつの時代も罪のない子供たち、か・・・」
表情を変えずに真珠が言った。
「哀れむなよ、レン」
俺は黙ったままのレンの頭をなでる。
「俺もおまえもああなっていても、おかしくないんだからな」
路地裏の子供たちは俺達を見つめていた。

「じゃあ、買い物だけして出かけるか」
大通りに戻ってきた俺達は買い物をするために真珠・あんず組と俺・レン組に分かれた。
「とりあえず食い物を買いに行くぞ」
今だ黙ったままのレンの手を引いて俺は歩き出す。
「・・・お兄ちゃんはかわいそうだと思わないの？」
うつむいたレンはぼそりとそう言った。
「・・・むしろ、」
レンが不思議そうな顔でこっちを見た。少し怒りも混じっていた気もする。
「俺は怒ってるよ。そうなってしまった社会に」
レンはまたうつむいた。

「子供だけで生きていくのは本当に難しい事だ。社会もそれがわかっていて、それでもあんな状況を作ってしまう。仕方ない、じゃすまされねぇはずなのにそれがすまされるのが今の社会なんだよな」
レンがこくんと頷いた。
「哀れむな、って言ったのは、哀れみはそのまま行動に移ってしまうからだ。恵む物が無いからじゃない。あいつらが何かを恵んでもらってためになると思うか？」
レンは首を横に振った。
隣の公園では紙芝居をやっていた。あの話はお姫様が城を無くし１人生きていくという悲しい・・・実話だ。あのお姫様もレンも強く生きるしかないのか・・・？
「ああなってしまった以上、自力で生きるしかねぇんだよ。自分の頭と身体と根性と運を使いこなして生きていくしか道はねぇんだよ」
レンはうつむいたまま頷いた。
「おまえは運が悪い中でも運が良いほうだったんだよ」
俺はうつむいたままのレンの手を握る。
「明日も行きぬくためには戦いつづけなきゃなんねぇ。そのためにも食いもんの買出しに行くぞ！」
「うん！」
レンは前を向いて頷いた。

「お姉ちゃんたち、ただいま！」
食料を買った俺とレンは待ち合わせの場所へすこし遅れて到着した。
「レン、元気になったのだな」
「よかったですわ」
やっぱりあの二人もよく見ているものなのだ。結構感心した。
「心配してくれてありがとう。もう、大丈夫！」
元気よくレンが言うのを見て少し笑顔になる二人を見た。
「じゃ、明日は元気よく仕事に出かけますか！」
「うん！」

明るいレンを見て柄にも無く安心していた。

むくりと俺おきあがったとき、朝日がオレンジ色をしてた。
「やっぱ、この色じゃないと朝起きたって気がしないんだよな」
俺はその場で大きく伸びをした。
今日は朝から魔物退治という仕事に出かける予定なのだ。おちおち寝ていられはしない。
街の中は夜の静けさとは違った静けさが満たされている気がする。
俺は身支度を整えてから部屋を出る。
いつも思うが、こうやって泊まっていた部屋から一歩出るときって、新しい1日が始まったって感じがするんだよな。なんだかんだいって毎日一つ一つが新しく感じる。だからこそ楽しんだけどな。

「お客さん早いですね―」
「朝日が出ると目が覚めるもんで」
宿屋の親父は朝早くから飯の仕込みをしていた。昨日は女将さんが晩飯を作っていたんだが、飯の味だけをいうとかなり当たりだった。
俺は飲み物をひとつ頼んで仲間が来るまでの時間を潰した。

「おはよう四月」
振り向くとそこに真珠が立っていた。
「よう、おはよ」
俺は短く挨拶をしといた。
真珠も飲み物を頼み俺の隣に座った。
それから少したってからあんず、レンがそれぞれあらわれ早めの朝食を開始した。
どれぐらい食べたかと言うと
「お客さん達よく食べますね―」
と店の親父に感心されるぐらいしか食べていない。

大きな荷物は宿屋に預けっぱなしで俺達が外に出たときには、もう光が白かった。
そう、ここからが俺の活動時間だぜ。
「じゃあ行くか！」
「はい！」「ああ」「わかりましたわ」
俺が振り向きながら3人にそういうと、それぞれ違う言葉で元気よく（？）　同意してくれた。
じゃ、いくか。
苦労するかなんて行ってみなきゃわかんねーしな。

Partner light8

望んでも
望みつづけるだけで
終わってしまうのか
命とは

Partner light #8

他の命によって
維持するものか
誰が否定できるか
たくさんの命が
調和して生きる
それがもし崩れたならば
またいつか
調和が始まる

「あんにゃろー。こんな微妙なのを持ってきやがった」
俺はクレイモア片手に悪態をついた。
「おまえの脅し方が悪い」
真珠ー。ひどいよおまえ・・・
「確かにあれは脅しでしたものね」
「脅したつもりは半分ぐらいしかないんだぜ」
「半分はあったていうことですわね」
・・・まあ
「ぼくはこれぐらいでぴったしですよ。初めてですもん」
「そういっても・・・これはなあ」
・・・

もうやめてくれー、と叫びたかったり。
「まあ、ひとつづつ片付けていきましょう」
そう言ってレンは目の前のうざこいものをひとつ片付けた。
「仕方がないな」
そう言って真珠も剣（光で作られたもの）で目の前のそれを切る。
「体力勝負ですわね・・・」
体力に自信のないあんずがげんなりと言った。

――――――四半時ぐらい前
「四月、こっちであってるんですわよね？」
「ああ、確かだぜ」
朝日が眩しい中俺は少し遠くに見える城壁を見る。この当たりの街は城壁の中に城はもちろん街までも入っている。だから白壁の城壁は見えても街は見えないのだ。あれのせーで駆込み入国ができないときがあるんだよなー。
「四月、仕事内容を読んでくれんか」
真珠がこっちを見ながら言う。確かになんも言ってねーな。俺はデータボードに視線を移す。
「スライムやゴブリンを中心とした雑魚退治みたいだ。確かに楽そうな仕事だぜ」
「もう近くまで来てるの？」
俺の顔を除きこみながらはしゃいだ声で言うのはレンだ。
「ああ、もう目と鼻の先って奴だぜ」
「あれではありませんか？」
先行して歩いていたあんずが指を指した。
「そう・・・みたいだな」
真珠が同意してあんずに近寄っていく。
そこで俺は剣を抜く。
「じゃ、いっちょやるか」
隣にいたレンに話し掛けると

「うん！」
と、また元気のよい返事が返ってきた。
今俺の前ではスライムとゴブリンがごちゃ混ぜで蠢いていた。
数くらい書いとけよ、データボード！普通ここまで多いとはおもわねーって。
その数、およそ１００．雑魚も多いと大変なんだって。何回も言ってるだろー。
あんずは無駄に数の多いスライムを片付ける事に専念していた。
ここまで数がいると真珠も人の事を気にする余裕があまり無いみたいだ。
レンは俺のすぐ側にいた。実践慣れしていないレンは、はっきり言って背後を取られがちだったのだ。それではさすがに危ないため俺の近くにいてもらうことにしたのだ。レンは苦無を握り締め一匹ずつスライムを切っていく。
俺はと言うと・・レンが近くにいるため大技が繰り出せない状況が続いていた。ま、こんな雑魚相手に大技もなぁ。俺の相手は主にゴブリンだったが。
着実に数を減らしていく。１／３ぐらいは倒したつもりなんだが。
大技が繰り出せない以上一匹ずつ確実に殺って行くことが重要だ。
てことで俺は首だけを狙って突いていた。奴らは別に集団行動を取ってくるわけじゃ無し・・回れ右前へ進めとかやってくれると楽しかったんだが・・見え見えのフェイントは個人でかけてくるだけだった。俺にとっては怖くないんだが、
「うあっ」
「レン！？」
スライムの一個がレンに体当たりし、レンがこけそうになる。
「やべっ」
俺は何とかレンを支えたのだが、
「っう！」

左腕、浅い切り傷。
そのまま相手を確認せず無理な体制からレンの金票を抜き相手に投げる。切り傷を作る奴はこの場にゴブリンしかいない。
「ちっ」
この世界で鎧をつける剣士は王宮お抱えか二流である。魔法の普及した現代では重くて動きがさえぎられる鎧など不必要なのである。なぜなら魔法はいとも簡単に鎧を貫くからだ。
だが、この混戦では
「鎧が合ったほうがよかったかも・・」
いまさら遅いけどな
そのまま無理やりレンをかばいながら戦いの輪の外に出る。かすり傷くらい、どおってことねぇ
「お兄ちゃん」
「大丈夫か、レン」
「お兄ちゃんが・・・」
心配そうにレンが俺を見つめる。
「大丈夫」
それだけ言って俺は立ちあがる。
「あれじゃ、真珠に負担がかかりすぎる。ここにいろ。俺が戦ってるあいだは敵もここまでこないから。」
こくんと、さびしそうに頷いた。
「・・回復したら、また俺の近くまで来て戦ってくれよ。」
今度は前より少し元気そうに頷いた。
「いってくる」
それだけ言って俺は戦地へと舞い戻るため走り出した。
走って行くと敵さんもすぐに俺の存在に気がついたらしい。またゴブリンどもが個々の攻撃を繰り出す。前の奴は自分の右ストレートを囮に、右後ろの奴は前の奴を勝手に囮にし、それぞれ攻撃する。
「よし、・・」
左後ろにはいない。

その左後ろに一歩後退しぎりぎりのところでよけておく。どちらのゴブリンの攻撃もあたりやしない。
こっちの攻撃は奴らの腕よりリーチがある。
薙ぐ
撥ねる
攻撃態勢のまま2匹は倒れる。右から左へとやったクレイモアを少しだけ切っ先を上げ左からの敵の頭を陥没させる。
なんかいやな音がしてそいつが倒れたのを見た。
「・・・剣がやばい」
多対一の基本を守りきれなかったぜ。こういう時は切るんじゃなくてつかねえとどんどん切れ味が悪くなんのにー。
すでに時遅し、だな。普段の半分ぐらいになっちゃってるもんなー。
しゃあない、第2必殺を使うかー。あれ使うと疲れるんだよなー。
少し多めに間合いを取る。そしてかっこよく詠唱する。
「・・・＜その刃は・・・」
このクレイモアはある有名な剣士から譲り受けたものである。
「・・炎のごとき美しい波を打つ・・・」
心を切る技は並の剣では負担がでかすぎて使えない代物なのだ。
「・・波は美しく・・」
その剣士ともいろいろあったのだが・・
「・・かたく波打つ」
まあ、兎に角譲り受けたんだ
「炎の魔剣、ルノー・ド・モントヴァン＞」
剣のエッジがぐにゃりと曲がる、波打つ。いつ見てもきれいなんだよなー。
形が定まったとき、普通の剣なら“フランベルジュ”と呼ばれるのだが、
「ふっふっふ。モントヴァンは一味違うぜ」
詠唱が終わったころには周りにスライムもゴブリンも大量に集まってきてた。

俺はその間を走り抜けつつ集まってた奴の一部だけを傷つけていく。
そう、この魔剣ではこれで十分なのだ。
「・・＜苦しみより死を＞」
その一言だけで、少しだけ傷つけた部分が黒変して奴らはばたばたと倒れていく。
「これぞ、奥義『ラーズスヴィス』」
うっしゃ！きまったー！！
心の中でガッツポーズをしながら俺は次の敵にと向かう。
走りながら敵を傷つけていく。・・２０ぐらいたまったかな？
「＜苦しみより死を＞」
この技の参入によりだいぶ有利になったぜ！
「次は・・・」
「うわっ」
・・・真珠か！？
俺はその声がしたほうを見る。・・・真珠が相手をしきれなくなってた事に気がつかなかった！前後左右からの攻撃により体制が崩れきってる！！
「やば・・・」
「＜旋律を造りし風の精霊よ、ぼくの仲間を守って＞」
ぎん、とゴブリンの持つ刃がはじかれる。
「・・風の守りか」
真珠を救ったのはレンの召喚魔法である。
「・・・なんとかなりそうじゃねーか」
うっしゃ！ここから巻き返しだぜ！！

Partner light9

意識はない
それでも
記憶はあるらしい
信じる事なんて

Partner light #9

できやしない
道はない
覚えは無い
記憶だけが
それをしめる
それがなんなのか
いつか
いつか知るのだろうか

俺の右手の袋からちゃりっと音がする。
そして、ずっしりと重い。
「くっくっく・・・必死になったかいがあったぜ！」
中身？言わずと知れた貧乏には周ってこない天下の周り者！
そう！かねだー！！
「当分、お金には困らなくてすみそうですわね」
俺の手の上の袋を見ながらあんずが言う。
「・・・これだけあってすぐに困る人っていうのはとんだ浪費家だと思うんですが」
と、これはレン。
「そんなものなのか？」

「そんなものですわ」
世間知らずの真珠は相変わらずである。
「・・・すぐに困る方法なんていくらでもあるぜ」
俺は右手に袋を乗せたまま言う。
「一番簡単なのは遊ぶ事だな。例えばゆう――――」
ごすっ
俺は前にこける。後ろから蹴りを入れられたようだ。
「昼間っからそう言う事を言わないでください！！」
「じ・・冗談だって、あんず」
「あなたが言うと冗談に聞こえませんわ」
・・・ひどい言われようだよな―。
レンがくいくいとあんずの服の裾を引っ張る。
「何ですか？」
「・・お兄ちゃんはなんて言おうとしたの？」
あー、真珠もわかってないらしい。聞かれたあんずは固まっている。
別に答えてもいいのだがあんずにまた怒られそうだからな。もう怒られるのやだし、俺にふられる前に逃げるか。
てことで後ろをほっぽいといて俺は歩き出す。
「・・もう夕方か」
モントヴァンを使った所為か身体全体がだるかった。
誰かがいっしょにいるとつい元気なふりをするのはきっと俺の悪い癖だ。

赤い炎が舞い踊る。
・・またあの夢か。
なんだかわからない、夢、ゆめ、ユメ。
俺の記憶の一部でしかないはずなのに。
俺には覚えが無い。
見たことなど・・・
炎が舞い踊る。それだけの夢。

最後に黒い人影が見える、それだけの単なるゆめ。
でも、何かを案じさせるユメ。
これはなんなんだ。
ああ、見たくない影。
ああ、黒い人影。振り向こうとすると目が覚める。
そう、今だ。
目は覚めない。
振り向いたそいつの口元が見える。
覚めてくれ。
ニヤリと笑った口。
はやく・・はやく・・・・
残忍な。
覚めてくれ・・。
俺はこいつを知っている。
見たくない。
そう、コイツは・・・
・・・
がばっと体を起こす。
何か赤い夢を見た。
鮮明な気がするそれを俺は
思い出せない。
いや
「思い出したくない・・・・？」
いつのまにか俺はつぶやいていた。

俺が階段を降りていくとそこにいた真珠と目があった。
「いつもより遅かったな」
「それでも普通より早いんだぜ」
俺は真珠の隣に座る。ふー、と息を吐く。
「・・・疲れているな」

「ん、夢見が悪かっただけさ」
このよくわからない疲労感を隠すためにも俺は明るく言った。
「・・おまえが夢ごときで疲れるのか？」
「・・・こんな繊細な俺を捕まえてそんな事言うか？」
いつも通りだ。
「おまえが繊細なら他の奴らなど触っただけで砕けるな」
「言うねぇ」
いつも通りの朝だ。

「もうそろそろこの街を出ようと思う」
朝食を食い終わってすぐにこの発言。
「そうだな。そろそろ飽きてきたしな」
とりあえずすぐ賛成したのは真珠。
「それも良いですわね」
少し考えてから賛成したあんず。
「皆さんにお任せします。」
レンはそう答えた。
「よし、じゃ決定で！」
みんなが頷くのが見えた。
「買い物解散！」
がたがたと椅子から立って真珠、あんずと俺とレンにわかれて買い物に行く。

レンが今買ったばかりの買い物内容を確認している。
「・・・携帯食料ｏｋ、お薬ｏｋ、お茶ｏｋ、全部買いましたよ～」
「戻るか」
「はい」
相変わらずレンは元気だ。
あの最初の守ってやらなければ感は少なくなっていた。最初のころは肉体的な面はもちろん、精神的な面で守ってやらないといけない

と思っていた。今は肉体的な面だけでも良いかもしれない。
強くなれよ、俺はそう心の中で前を行く彼に声をかけた。

「ちゃんと買ってきましたわよ～」
遠くからあんずが声をかけてきた。
俺はそっちを振りかえる。
そこには真珠とあんずがたっていた。
「んじゃ」
みんながこくんと頷くのが見えた。
俺は前を向く。
「行きますか～！」
「はい」
3人の声がハモった。

Partner light10

泣きたくても
泣いてはいけない
縛り付けるそれが
自分が何なのかを

Partner light #10

はっきりとさせる
それが自分の仕事だもの
自分が何者なのか
誰も彼も
知っておく必要があるの？
いいや
知らなくても良いことだって
たくさん在る

森、草原、森、の後は遺跡に行く事になっていた・・・。
っとに、あんなとこに遺跡があったとはな。

この世界は第一期と第2期とが以前在ったらしい。
第一期って奴は神々の世界って呼ばれてる。
第2期は六賢者の世界って呼ばれてる。
第2期のころには色々神殿ができたらしい。その残骸が遺跡になっているようだ。
そしてその遺跡にはたくさんのお宝が埋まってる。

「誰かが入った痕跡はねぇな」

真珠の光の魔法によって照らされた床を調べたが最後に人が入ってからだいぶたっている。最近な可能性はまったく無い。
「ということは・・」
あんずが明るい顔でいう。
「あたりだーーーー！！！！」
続きを俺が大声で言った。
その隣で真珠とレンはよくわからない顔をしている。ホント物知らずな奴等だぜ。
「人の入ってない遺跡＝宝在り？！　なんだよ」
ああ、と言った感じにレンが手を打つ。
相変わらず真珠はよくわかっていないようだ。
「・・・そんなものか？」
あのなあ・・
「そんなものですわ」
やっぱりよくわかってないようだ。

真珠の魔法によって照らされる薄暗い長い廊下を歩く。
順番は真珠、あんず、レン、俺と言う妥当なところである。
半時ほどの時間を歩いて出会った魔物は2匹。それなりの遺跡の定石通りである。
ちなみに倒したの魔法(ごーれむ)傀儡だけだ。もろいサウンドゴーレムなんか俺様の敵じゃねーぜ。
「道が分かれている」
前を行く真珠がぎりぎり聞こえる程度の声で言う。大きな声だとそれがきっかけで魔法傀儡が起きる場合があるのだ。それだけは避けなくては。
「どっちに行くの？」
レンがこっちを見ながらこれまた小声で聞く。
「そうだな・・真珠、風はあるか？」
ちなみにこの中では俺が一番この、遺跡荒しの知識があるようだ。

真珠は手を出し風を調べる・・。って、かすかな殺気が！
「真珠！手を引け！！」
普通にしゃべるのと同じくらいの声で言った。
とっさに真珠が手を引く。そして
ぶぅんとそこをフレイルが通る。
「っち」
真珠は光で作られた短剣を構える。
って、真珠の解説してる場合じゃねぇなー。
俺は後ろを振り返る。そこにはなにもいないが、確かな殺気。
入るときにすでにモントヴァンにしてあった剣を構える。
床から緑を基本としたいろんな色の混ざった気持ち悪いぬめってそうなものが生えるように出てくる。およそその数三体分。
「廃棄生物（ディスポーサルクリチャー）か！」
やっぱ遺跡って異常な生き物が多すぎだよなー。
いま俺の前にいるのは魔法生物（ソリセリークリチャー）を作ろうとしてミスった奴である。
はっきり言ってグロい、クサい、ウザい、の3テンポそろった見事な奴である。
相手？したくねーに決まってるだろ。
モントヴァンが汚れたら前の持ち主に殺されるー！！
ちなみに真珠の前にいるのはがっしょんっがしょんいう音からして傀儡鎧（マネッジアーマー）。
ってルビ多すぎー！！！！
ちなみに傀儡鎧は勝手に動く鎧。以上説明終わり！
「四月どうしますの？」
「3人は鎧のほうよろしく！」
俺の目前の気持ち悪い奴が触手（？）を突き出す。俺はそれをモントヴァンで切る。
どやって倒すっかなー
ラーズスヴィスを使えば一発じゃんっておもったそこの君。あんな疲れるものこんなしょっぱなからつかれるかー！！

で、そういう場合の倒し方1、魔法生物および廃棄生物の場合→相手の身体のどこかに全部をまとめている「核」がある。それを壊す事だ。
二つ目三つ目・・・はまた今度！解説しながらよけるのはつらいっス。
てことで核を探しているのだがそれが・・
簡単に見つかっちゃうのが廃棄生物なのだ。なぜかと言うと身体が半透明だから。よく混ざってんだよコイツラ。
てことで核をすっぱり切ることに専念！
「＜ヒートブレイド＞」
この魔法は剣の刃身が熱くなり切れ味が上がる魔法である。あるていどの剣なら付属されている魔法のひとつだ。
その剣で核を
「はぁ！」
ぶった切る！！
廃棄生物は核を失い魔力となって空気中に放出された。
ほかの2体も同じように片付けていく。
俺が終わっても向こうはまだ戦っていた。
俺は剣の魔法を解く。
そして観戦。
・・・がんばれよー。俺の相手してたの三体分と同じくらい強いからなそいつ。
お、真珠の光の矢が命中した。
終わったみたいだ。
「心しとけよ。廃棄がいたってことは本物の魔法生物とも出会えるかもしれねえぜ」
鎧を相手していた3人の背に向かって言う。
「失敗したくて失敗したのではなくて成功したくて失敗したわけですものね」
あんずは小声でそう言いながら色鉛筆を握り締めた。

「そいうこと」
「その割には四月は余裕だな」
少し疲れた真珠の声。
「なんでですか？」
次はレン。
やっぱ普通は構えるもんだよな。
「・・魔法生物なんか片手でひねっちゃうくらいべらぼうに強い人に合っちゃったからかな」
誰にも聞こえないぐらいの小さな声でつぶやく。
でもそれはいえね―な。
「さあな」
次は聞こえるくらいで言っておく。
そう
あの人の存在は他人にはしゃべりたくない・・・
てか、思い出すだけで・・・うぃ～

Partner lighttl1

あのことを
今笑い話にできる
自分が
とても良い事だと

Partner light #11

ぐっと身に感じる
あの時は
それだけが
自分の存在だった
自分の過去だった
自分の現在だった
今はもう
なんでもないもの

例の傀儡鎧が出てきた道のほうを行き始めてもう結構歩いている気がする。
次にどんな魔物が出てくるかわかんねーし。気を付けてねーとな。
順番は相変わらず同じ。つまり俺がまかされたのは後ろってわけだ。
・・・後ろだけってわけにはいかないのかなー。
・・・なんか来てるよな、前から。
真珠はいまいち気付いてないかなぁ。しゃーねぇ。
「真珠、前」
それだけでわかったらしい。剣を構える。
「何が来る？」
じりじりと近づいて来てはいるが・・殺気は感じる。音は無い。

「生物、かな？」
そうか、と言って真珠は短剣を構えるその手をしっかり握る。
にゅいん、と右からの殺気を感じる。あーあ、こりゃきたなー。
「あんず、レン横・・右を気をつけろ」
二人は構えたまま右を向く。
壁から来るってことは・・・魔法生物か廃棄生物だろう。
「レン、魔法を使う準備をしたほうが良いぞ」
こくんと頷きレンは普通魔法を使う準備をする。風が無いから風の精霊を呼び出す事はできないらしい。普通魔法はどこでも使える分楽ではある。
・・前から2匹横から2匹後ろから2匹が妥当なところか。
「真珠、前の2匹分なんとか絶えてくれ。あんず、レンは横の2匹を頼む」
言葉と同時に前、右、後ろから2匹づつの生き物が出てくる。
「前は魔法生物一体と廃棄生物一体だ！」
「右は廃棄生物が2体ですわ」
「後ろは下等魔法生物一体と廃棄生物一体！真珠、無茶はするな！！」
俺は前と同じくモントヴァン＋ヒートブレイドをかけた剣で廃棄生物の核を狙う。
コイツは楽なんだけどなー。
いつやらのように気体化して消える廃棄生物を横目に魔法生物に向かって刃を向ける。
奥義で蹴散らして真珠を助けるのが妥当かなー。それとも第3必殺を使うか・・・。消耗が少ないのは第3必殺なのだが・・。馬鹿らしいんだよな。
「くっそ・・」
真珠はだいぶ苦戦してるらしいし誰も聞いてねーだろうし腹くくるかー。
「＜その刃はいつまでも素直な線＞」

エッジがぐぐっと直刀となる。つまりクレイモアに戻る。
そして俺はその次の詠唱に小声で入る。
「＜氷よわが友よ、我ソラスリスファに力を貸したまえ＞」
構えるクレイモアに力が集まるのがわかる。
そして魔法名も唱える
「＜アイスストーム＞」
クレイモアの刃身が青白い光を放つ。
魔法剣という術である。
ある一定の・・って説明は後か。目の前の倒して真珠を助けねーと。
「はあ！」
アイスストームのかかっている状態とかかっていない状態では攻撃力がだんちである。
核を切る云々の前に下等魔法生物程度ではその身体が核をひっくるめて全て消滅してしまう。あいつ等防御がなっとらんから。
完全に2匹ともが消滅したようだし、真珠の手伝いかな。
右からの廃棄生物は一匹に減っていた。前の方も廃棄生物のほうはもうそろそろ倒せそうだ。
前まで行くよりこっから魔法を放ったほうが早いかな。そうしよう。
「あんず、レン、それ以上下がるとあぶねぇからな。」
「？わかりましたわ」
あ、無理やり納得した・・。
まあ、いっか。説明は長くなるし。
俺はクレイモアを床にぶっさし、以外と軽く入った・・。そしてロングボウを引くかのような前体制を取る。
じじっとその右手に氷でできた矢が伸びる。同時に左手の構えから魔力のみでできた弓が伸び弦を張る。矢をつがえそれを引く。
「＜アイシクルアロー＞」
唱えながら矢を放つ。解説は長いけどここまでの動作は結構時間がかからない。
光でできた矢は一直線に魔法生物へと飛ぶ。これでも一番魔力の強

いところ、核を狙ったつもりだ。
当たる。そして魔法生物が霧散した。
ちょうどそのときには他の廃棄生物達も殺られたらしい。
俺は魔法の弓を消し床に刺さっているクレイモアを抜いた。
「終了だな」
顔を上げてみてみるとみんながこっちを見ている。
「どした？」
「おまえの本職は魔法使いか？」
「違うけど」
「並の魔法使いより強いのでは・・・？」
「そうか～？」
ふと気付いたが、俺の知っている魔法使い（？）を基準に比べている事が間違いなのかもしれない。アイツ色々異常だったらしいからなぁ・・
「だって普通の＜アイシクルアロー＞一発では魔法生物を倒す事はできませんわよ」
・・・俺の基準が間違ってたのかなぁ、やっぱり。
でもあれは・・
「魔力の一番強い核を狙って貫通力を強くして放ったからさ」
「その程度でどうにかなる相手だとはおもえんし、第一最初の魔法生物はどうやって倒したんだ？魔法を使っているようではなかったし」
「あれは魔法剣で・・・」
「魔法剣？」
レンがよくわからないとでも言うように首をかしげている。
「剣に魔法をかけてそれで戦う技、とだけは知っていますが・・・」
普通は知らないものなんかな～？
「まあ大雑把にはそうだよ。あとは色々、並の剣じゃ魔法に耐え切れないから名のある剣しか使えないとか、一回かけてその魔法を放つともう一回かけ直さないとただの剣に戻っちゃってるとか、いろ

いろ面倒だから使わないんだよなー。モントヴァンと心を切る技さえあれば平地では十分だし」
「へー」
「それにしてもいつ氷の詠唱をしたんですの？」
「・・っと小声でいつのまにか」
本名を知られたくないんだよなー。ソラスならまだしも正式名のほうはどうもなれねぇ。
「・・・大量の雑魚のときにはなぜ魔法をつかわなんだのだ？」
本名を知られたくなかったからです。
「お兄ちゃんなにか隠してるよね」
レンにまで言われるとは・・・
「呪文は聞こえてもよいらしいな」
「詠唱を聞こえないように言った、と言う事は・・・」
「詠唱の全部もしくは一部に何かある？」
掘るな！えぐるな！！
って言ってやりたいけど言ったら墓穴だ！！いえねぇーー！！！！
「詠唱・・詠唱・・・」
考えるなー！！
「！」
レンがなんか思いついたー！！
「お兄ちゃんソラスって名前だよね」
キターー！！
「ああ」
「詠唱してみてよ」
・・・・
「ああ！」「なるほど」
真珠、あんずもわかったらしい・・
「さあ！」
「・・・」
「できないの～」

「・・・」
「ねぇ～」
「・・わかったよ、やりゃ良いんだろ！」
昔は正式名で無いとできなかったが今ならできるかも！！期待！！
「氷よわが友よ、我ソラスに力を貸したまえ」
失敗・・・か。いちお唱えるけど・・・
「アイシクル」
しーん、だ。
『・・・』
「で本名は？」
「・・・」
「わかるまで聞きつづけるわよ～」
こいつら・・・声が笑ってやがる～！得にあんず！！
いつかばれる事、だったのかも知れねぇが・・・う～。肩に手を置くな！！
「＜聖なるものよわが友よ、我ソラスリスファに力を貸したまえ＞」
へん！そのうち笑え無くしてやるぅ～
「＜ケア＞」
全員の体力をある程度回復させる魔法である。
「女性の名前ですよね」
レンは控えめだなあ。
「まあ、おまえ性格と度胸と身長以外はその名前で行けるな」
「うるせー」
あんずはなんか考えてるな・・・。やべぇ。ぽん、って手ぇー打ったし。
「エイプリル家のソラスリスファというと、あの・・」
「ストップ！いうなよー」
って時は遅しだったようで。
「亡国のお姫様・・っぷ」
「いうな、笑うな、ばっきゃろー！！」

「お姫様」
「あのころは王子って発表されてたら俺暗殺されてたのー！！」
「お姫様」
「女だったのは餓鬼のころのみだ！！」
「今でも綺麗な顔してますものねー」
「るせぇ！これの所為でかなり困らされてんだよ、俺は！！」
「で、今はこれなわけか」
「良い家育ちだとは思えませんものね」
「・・るせぇ。城の記憶なんてほとんど無くしたよ。覚えてんのは家教の顔としつけ云々の話のみだよ」
「・・四月？」
やっぱ雰囲気変わってンのかな・・。
「こんな俺でも一緒にくるなら来い。俺は進むだけだ。」
昔から家の、あのころの話だけは触れたくなかった。記憶のかなたにはあるが思い出すのは億劫だ。そして怖い。一人になった餓鬼の俺を拾ってくれた人もそれだけは触れるといやがったといっていたっけ。
「亡国の王子様が一緒なんて楽しいな」
とんと真珠が頭に軽くチョップを入れる。
「馬鹿が、あの国には姫さんしかいなくてその子はもういないよ」
あの人に拾われてこの道を歩み出したときからあの子はもういない。国の無い姫なんてどっちにしても笑い話にもならない。
「国の事は話せないけどその後の事はいずれ話してやるよ」
「それは面白いんだな」
「つまらなかったら蹴飛ばしますわよ」
「楽しみにしてるよ」
こんな暖かいところは2度目、かな
「今度はおまえ等の過去もえぐって見せるからなー」
ニッと笑って見せた。

あとで考えてみるとこの面子すごい組み合わせなのだ。
破壊の女神の化身、を筆頭に。それ考えると俺なんてたいしたことねぇじゃん、そう思ってた。

Partner light12

つい
つい最近のはず
いろいろあったと
自覚してしまう

Partner light #12

始まりを
覚えていても
覚えていなくても
今がある
未来がある
そして
過去もある
忘れられやしないが

「やっとそれらしいところに出たじゃねぇか」
大広間、とでもいうのだろうか。ただっぴろい空間である事は確かである。入ったとたん何処からともなく明かりがついた。真珠は光を消す。
そこに魔法傀儡――ゴーレムの姿があった。
「定石通りだな」
あんずがこくんと頷く。
2体のゴーレムの後ろには扉がある。おそらくそこから先がこの遺跡の中で最も重要だった場所だろう。
「これまで出てきたのと違う形をしているな」
「シンプルになりましたね。相変わらず素手ですけど」

「ごつければ強いわけじゃないからな。材質はわかるか？」
俺の問いにあんずが触って調べる。
「・・青銅ですわね」
「青銅・・・銅と錫の化合物だっけ。なら・・」
たしかゴーレムの金属と属性には法則があったはずである。
金属を作る錬金術がかかわっているためにできる属性だったはず・・。木製や砂製のゴーレムにはその素材そのものの属性がつく。金属製は金属の属性と錬金術上の属性がつく。
「・・・銅は金星、錫は木星」
あ、わかってない顔だ。まあ、知らなくてもどうにかなる知識だしな。
「金属によって属性が違うんだよ。青銅なら土と風の属性がプラスされてるんだ」
実は他にも命令の聞き具合違ったりと色々あるのだが・・・。
「へ～」
「だから＜アース＞や＜ウィンド＞をかけると傷が回復したりするんだ。なんなら試してやるけど」
冗談で言うと
「絶対にやめてくださいね」
あんず・・・。普通に考えてしねぇだろ。
「お兄ちゃんならやりそうだもんね」
「うんうん」
「おまえ等ひどいな・・・」
相変わらず、と心の中でつけたし。
「おまえの薀蓄はどこでためられたんだ？」
「そのうちな」
言いたくないから話を切る、これは技術だと思う。
「で、ここで殺っとくか？」
その後話をそらす、に向かう流れ技だ。
「どうせ扉を開けようとしたら攻撃してくるのであろう」

「そういうこと」
しゃー！成功！
「今ここでやるべきですわね。」
武器を構える。
「俺が起こすぞ。できれば一匹ずつ相手したいんだがな。どうだろ」
「それは相手の考えによりますよね」
「と言う事だな。四月、チャっチャとやってくれ」
「りょーかいっと」
そう言いながら俺はクレイモアを右の魔法傀儡に振り下ろす。
ガキィンとド派手な音がして攻撃した一匹が立ちあがる。
「四月左！」
「ちぃ！」
右のサイドステップで左の同時に起きてしまった魔法傀儡からの攻撃を避けようとするが右の奴の攻撃がそっちから来ていた。その拳をクレイモアのフラットで受け流す。
「旋風の色よ！」
同時にあんずの放った色が奴の身体にぶち込まれる。
「きいてないの？」
あんずがそう声をあげるのもわかる。一瞬止まってあんずを確認してすぐ俺を攻撃する事に専念してきたのだ。でも当たったところへこんでるよな～。つまり
「きいてるんだ。だからあんずを確認したんだ。おそらくこいつにかかっている命令は・・！」
左の奴からの攻撃。左斜め前上から拳が飛んでくる。うしろ・・いや前に避けて真珠達と離れたほうがいい。こいつの命令は・・
「『目覚めたら一番近くにいる奴を攻撃』っだ！！」
ただの力技かよ！
「あんずは牽制にまわってくれ。レンはそこから魔法援護をたのむ」
「わかりましたわ」「はい！」
「真珠もそこで援護。もしくは・・」

「こういう事だろう」
いつのまにか俺の隣まで回りこんできていた真珠は光でできた剣で魔法傀儡を一閃する。
「よろしくすんぜ！！」
と言っても光の剣をもつ真珠が近づくと・・・
「くっ」
やっぱり真珠のほうへ攻撃が行く。剣自体の力が違いすぎるためより力の強いほうを先に倒そうとするのは魔法傀儡や魔法生物の習性なのだ。
「真珠、一回下がれ」
こくんと頷いて真珠は数歩下がる。そうすると俺にくる攻撃もかなり多くなる。それでも真珠のほうが負担が大きそうだ。
剣の力を上げる方法は俺には二つある。魔法剣とモントヴァンだ、が唱えるだけの時間が無い。
そのときあんずの放つ魔法援護が入り魔法傀儡の動きを鈍くする。
これで魔法剣が使える！できるだけ短い時間で真珠と同じだけの魔法力を剣に持たせるには・・
「＜闇よわが友よ、我ソラスリスファに力を貸したまえ＞」
黒い闇がクレイモアに集まる。
「＜暗黒＞」
一発しか使えねーが仕方ねぇ。
真珠を狙っている腕のなかで一番危なそうなのを一瞬のうちに見極める。
「暗黒一閃！」
ずぶっと剣があの硬い魔法傀儡の肩に入り込む。
「はぁ！！」
そのまま勢いで切り落とす。
「・・・腕が一本減ったな」
「なんとか、だがな」
くそっ！闇魔法は負担が重過ぎたか・・・。目の前がぐらつく。船

に酔ったときみたいだ・・・。
「四月、左から！」
「り・・了解！！」
畜生、反応が遅れた！
呪文をかける暇はねぇな。どーすっかなぁ。受け流すしかなさそうだがツラそうだよなー。
仕方ねーし、俺は受け流すための体制を取る。が、
「＜ウォータシールド＞」
レンの声が聞こえる。
弾力のある水の盾がひだりからの拳を包み込む。その拳は、魔法傀儡は動きを止める。レンの魔力と精神力をかけて“盾”という形で動きを止めさしたのだ。
間一髪ってやつだ。なんとか助かったぜ。
「使いもんにならなくしてやる！＜全てにふれしわが友よ、我ソラスリスファに力を貸したまえ＞」
闇属性に無属性か・・・ここまでがんばんのも久しぶりだぜ。
「＜ブラスト＞」
爆発の魔法ブラストここではまだ発動させねえ。魔法の発動場所を魔法傀儡の拳の内側へと移す、って精神力の消耗が激しすぎるぜ・・・。移すのも精神力なら、その間の発動を止めとくのも精神力だからなぁ・・・。
よし移ったはず。っつうかこれ以上は俺のほうに魔法が撥ねかえる・・・。
「インサイド！」
ぱちんとならした指の音よりも内側から発せられたであろう爆発音のほうがでかかった。
「ってー！！腕じゃねぇ！」
最近使ってなかったからなー。狙いが外れて身体全体を吹きとばしちまったらしい。俺も強くなってんだなぁ。
ともかくこれで残りは一体だ。

「真珠、そっち片付きそうか？」
「お前が一回引き受けてくれたらな」
だいぶ疲れた声が返ってきたな、オイ。俺もかなり疲れてんだけどな・・
「わーった。引き受けた！」
言葉と同時にとんできていた拳を剣を使いうける。がぃん、と大きな音とともに俺に引継ぎがされた。
真珠は数歩下がる。そして光をねっていく。
「＜光よ、ここに集いて我に従え＞」
真珠が胸の前に構えた両手の間に光球がうねる。見た目の大きさは変わらないが光の密度とでも言うのだろうか、濃さがどんどん大きくなっていく。
そしてまわりが暗くなっていく。そこにある光を吸収して手の中の光球が肥えていくのだ。
「四月、離れろ」
俺は頷いて離れるしかなかった。まともに食らったら存在が消えそうな術だ。
「＜ライトエクスポーション＞」
その光をぽいっと魔法傀儡に向かって投げる。軽い動作だ。
光球はぽてっと魔法傀儡の厚い胸板に当たり床に落ちる。その光が爆発した。
光の爆発
音もなく
振動もない
静かな爆発
圧倒的な存在感
「・・・これか」
光の中にいる少女がゆっくりと振りかえる。
「この森で人に会うのは久しぶりだ、だな」
楽しそうに無邪気に笑った。

「俺も人に会うのは久しぶりな気がするぜ、だな」
俺はニヤリと笑い返した。

Partner light13

私達は
いつまで待てば良いのでしょう
その役目を
いつになったら

Partner light #13

実行できるでしょう
風化する事も
消える事も
できないのです
次に開かれたとき
私という
存在は
理解してもらえるのでしょうか

魔法傀儡と戦った次の部屋は祭壇がある部屋。そしてその次は宝物庫だった。
お宝を持てるだけもって・・・・全部なんだけどさ。
魔法の革袋につめたのだ。
革袋の入り口に通ったものを圧縮する魔法をかけてあるものだ。実際は圧縮とは名ばかりで一部だけをこの世界に残し残り大半を超物質界四次元以上にとばし、残った一部のほうにはもともとの姿を縮小したグラフィックを上にかけている・・・と大雑把にはこうなる。
他にも質量問題だとか保存問題、圧縮回復問題とかいろいろ細かいのだ。
そういう難しい原理のため本来は値の張るものなのだが俺自身が魔

法をかけたため革袋代だけの出費にしかならない。
「そんな魔法のかけ方何処で知ったんですか？」
「『最新魔法科学』なんかに論文がのってんじゃん」
「・・・あの本は何語で書かれてましたっけ？題目は世界標準文字ルーンで残りはばらばらだったと記憶しているのですが・・・」
「毎回ルーンの論文も2～3個はあるぞ。ちなみに今月発売したから買いにいかねぇとな」
「・・・」
「戻るぞー」

「四月、この先どうする？」
俺達はあの分かれ道まで戻って来ていた。
「んー。行ける状態じゃねえだろ」
こくこくとレンが頷いていた。初めてならこたえるわなぁ。
「では戻るぞ」
「ああ、でも探りだけは入れとく。ちょっと待ってろ」
魔法はホントに便利なものである。
「＜生活に使えしわが友よ、我ソラスリスファに力を貸したまえ＞」
俺は呪文を唱える前に帰る方向の通路へと進む。
「走る準備しとけよー」
「へ？」
3人の声が重なる。
「＜サーチビルディング＞」
俺の掌から離れた光が進んでいない方の道へと入って行く。建物の中に何があるかをあの光を通して見る魔法だが、少し危険も伴って・・・
「ってー！きたーー！！走るぞ！！」
即ダッシュ。
「へ？なんで走るのだ？」
「って、何をやらかしてくれたんですの？！」

「あわわわ・・・」
そりゃ怒るわな、前後左右から廃棄生物が襲ってくりゃ。
「探索の魔法をかけたんだけど・・欠陥があってさ～」
走りながら微妙に後ろを振り返りつつ言う。
「魔法系の生物の探索網に引っかかっちゃうんだよねー」
「ほんのり言うな！」
珍しく真珠が怒ってるな～。
「ほれ、先行って」
3人が先に行くように止まって待つ。その間に風系普通魔法の詠唱をしておく。
「みんな行ったし・・＜ウィンドストーム＞」
後ろに向けて放つ。そこで止まったままにしておく。
前に振り返る。前からも来ているらしい。
「頭下げろよー」
弓を構えるようなポーズを取る。
「＜ウィンドアクト＞シフトアロー」
ウィンドアクトとは風属性の小爆発技だ。それを矢として飛ばしたわけだが・・。
前から来たのも一掃できたらしい。
真珠の目の前にはすぐに外の森がある。
3人とも無事に出れたらしい。
俺も後を追って走る。その間に再度生活用魔法の詠唱を行う。
すぐに外の夕焼けの中へと出る。
そしてその地下への扉を閉める。
「＜封印＞」
ぎっちりと魔法による蓋ができていた。

「・・で、何かわかりましたの？」
あんずが疲れた声できいてきた。
「何も、って言ったら怒るよな」

「殴る」
「真珠の意見に賛成ですわ」
こえーなー
「・・・どうもあっちのほうが本筋だったみてーだな」
「・・どうして？」
「色々いるからな。中等魔法生物が数匹・・魔法傀儡、の配備は異常だな。黄金製が2体もいるしな・・・」
「そんな豪華なものを魔法傀儡にするのか・・・」
「強いんだぜ、黄金製は。剣で切ろうとしても剣が溶かされるし、近づくだけでこっちは大火傷だ。」
「なんでですか？金属の魔法傀儡なんでしょう」
「黄金は太陽の属性だからなー」
ああ、なるほど。とレンがうなずいた。
「で、そこまでして何を守っているんですの？」
「ちっとまってよ・・・」
俺は無言で魔法を進める作業に入る。
そしてある部屋に行きつく。そこにあるのは・・・
「行こうって言ったら嫌か？」
「当たり前だ」
「何があったんですの？」
「・・呪文書が・・・」
「・・・そんな惜しそうな顔をするな」
そんなに惜しそうな顔をしてたんだろうか？真珠の声が心なしかうんざりしているように聞こえる。
「あれ一冊が高いんだぜー」
「・・死んだらお金は入ってきませんよ」
レン、そのとーりなんだが・・・
「諦めが肝心ですわね」
「う～」

結局、その入り口には俺以上の魔力があるものしか開かないような封印をかけて去ることとなった・・・。
・・良いなー呪文書・・・。

「ちょっとの間金持ちですね」
楽しそうにレンが言った。
あの遺跡から持ち出してきたものの大半をこの街で売った。
遺跡にあったのは古代金貨やら魔法具やら武器などだったし、俺達に必要なものは無かったから宝石以外全てをうっぱらいそれらも大半を宝石に変えている。
宝石と言うのは何処でも何時でもあまり価値は変わらない。傷なんかは、高温の熱を発する魔法を当てたらふさがるし、宝石に魔法を閉じ込め魔法石とし一回きりだが魔法が使えない人でも閉じ込めた魔法が使えるように細工できたり・・と重く価値の変わりやすい金貨より好まれる。
と言う事で、この世界の旅人の大半は金より宝石を好む。傷をふさぐための魔法も存在するし、専門の業者もいたりするのだ。3割現金残りは宝石、これは旅人の基礎知識にすらなっている。
「しばらくの間は仕事を探さなくても良さそうだな」
「ですわね～」
女性陣二人もうれしそうに言う。
「重量が無いと楽だしな～」
その大切な宝石は入っている袋（の一部）を除き全て超物質界へと移転させられている。
その変わり・・になるかは怪しいが俺の右手には『最新魔法科学』の最新号がある。背表紙で殴ったら撲殺する事が可能かもしれない太さで、いつもより数個論文が多いのはたまたまだ。ちなみに今回の目玉は『宝石に半永久的に魔法を閉じ込め何度でも使える魔法石を造る方』・・と言っても閉じ込められるのは小さな回復魔法ぐらいのようだが・・。

「この本は今日明日とかけて大方読んじゃうから出発は明後日以降ってことで」
「・・そんな太いのを1日半ですか？」
「興味が無いのは読み飛ばしだ」
ニヤリと笑って答えておいた。

Partner light14

わたしは
動き続ける
私が何を示しているのか
私にはわからない

Partner light #14

それでも動き続ける
それが
私の存在理由
私が壊れても
別なものが
私の代わりをする
それでも私は
時を刻む

「レン、どんな話を読んでるんだ？」
俺はレンの持っていた童話集をのぞきこんだ。
レンはすぐに顔を上げてにっこり笑いながら答えた。
「不思議な国で男の子が二人冒険をするんですよ」
レンは楽しそうに話し始める。
その話は『二人の冒険』というタイトルのついているこの近くではみんなが一度は聞いたことのある話だ。
レンはエルフの童話しか聞いたことが無かったらしくて、よく聞く話の紙芝居をみて初めて聞いた話だと言ったから俺はレンといっしょに童話集を借りてきたのだ。
俺が『最新魔法科学』を読む隣で童話集を広げていたのだが、飛ば

し読みをしている所為で俺は結構早くに本を閉じていた。
真珠とあんずもめいめい読みたい本を読んでいる。
外はまだ明るかった。
俺は部屋を出て宿屋の一階へと降りた。

「お客さん」
と女将に声をかけられ俺は振り向いた。
「お客さんのお連れさんには魔法使いはいるのかね？」
「・・・えっと、いますが・・」
俺もそうです、とは言いたくないのでいわない。何かありそうだ。
「今日から三日間ね魔法大会があるのよ。いうなれば祭りなんだけど」
おしゃべり好きの女将の話を要点だけまとめていうと、この国では昔から魔法を重宝しており毎年魔法大会が開かれているらしい。大会に出るために毎年隣国から訪れる人もいるらしく、旅人も参加できるらしい。
大会の方式トーナメント方式で課題にあった魔法をその場で合成する方法で出来のよかったものが次の段階へ上がっていくのと、魔法のみの戦闘を行い勝者が勝ち進むのとを、毎試合ランダムに決まるらしい。優勝商品は
「懐中時計だ！！！」
ばん、と部屋のドアを開け言い放つ。
三人が振り向く。
「何の話だ・・・」
真珠は至極面倒くさそうにいう。
ざっと女将から聞いてきた内容を話す。
「ということで、優勝商品は懐中時計らしい！！」
「・・・四月、懐中時計がすきなのか？」
「無駄に輝いてますわね・・・」
真珠、あんずがうんざりという。

「良いじゃないか、懐中時計！シンプルかつゴージャスな日用品！！」
「で、魔法大会ですか？」
レンだけはいつもと同じ調子だ。
「そう、魔法大会なんだ！みんなで出よう！！」
「一人で行って来い。」
・・・
冷たくないですか？
「まあ、あたくしたちは合成魔法なんか使えませんし、特殊魔法や召喚魔法ではどうにもならないですわよ。」
「・・・確かに。」
俺も本来奇跡魔法の使い手だが「本職は魔法使い」といわれるくらい普通魔法が使えるし、それを合成することも出来るが・・・。魔法は使いたくないし。
「・・・賞品を見てから決めるか。」

『滅びし王国、サクラ国の王宮機工師が作りし時計』
カバーには王家の紋章が入っている。重厚なつくりの時計が飾ってあった。
これが賞品だ。
・・・・出るしかないな。
あれは、
「お袋の時計・・・」
そう、お袋が幼い俺に見せてくれた懐中時計・・・。
そのときのことを唐突に思い出していた。
大きくなったら貴方にプレゼントしましょう、とお袋は言った。
俺は、大きくなった。

「てことで、優勝してくる。」
見てきた時計のことを話し、三人にそういった。

「・・・記憶がないわけではなかったのか？」
そういえば三人には城の記憶がないって言っておいたんだっけ・・・。
「断片的にはあるんだよ、思い出せないだけでさ。」
自然にため息が出た。
無理に思い出そうとすると頭痛がするわけで・・・。

『第１０５回　魔法大会を開催します！！』
わー、盛り上がる声が聞こえる。
２００人以上が参加するらしく多数の競技場で準備がなされていた。
合成魔法のほうは基本はスタジアムでやるようだが戦闘はステージがいろいろあり各ステージ環境が違うという懲りようだ。
「八回勝てば優勝か・・・。」
その八回が大変なわけだが、勝負などいつでもそうだ。自分の命がかかっていないだけ今回はましだと思う。
「・・・オレの一回戦は・・・」
『合成』
の文字が俺と対戦者の間に浮き出していた。

合成魔法とはいろいろ広さがあってこの前俺が使った「＜ウィンドアクト＞インアロー」などの魔法に効果を追加するのも合成魔法に入るらしい。
ちなみに「＜ヒートブレイド＞」など、剣を補強するための魔法以外を剣にかけることも合成魔法の一種とされている。つまり魔法剣は合成魔法なのだ。魔法剣が難しいとされる理由はいろいろあるが、主に強さを調整しないと剣が崩壊してしまうところにあるらしい。
俺自身はあんまり実感がわかねーけど。
その辺の魔法の分類方法は難しい上あいまいなため、魔法科学を専攻している人たちの間でも意見が分かれているらしい。まあ、想像力や工夫、実力でいろいろな使い方が出来るものなので分類するの

は難しいだろう。魔力の形を変えずに魔力のまま放出するという自爆性の高いことを普通にやってるやつも見たことあるし。
さあ、小難しい説明は終了して大会に本腰を入れよう！！
一回戦は合成のものが多いらしく（時間短縮のためだろう、日程に無理がありすぎる）スタジアムで同時進行で試合が進められていた。
俺の試合はというと・・・
『魔法石（一回だけ使用可なもの）の製造』というもので、大量の宝石の中から自分が使う宝石を選び、それに魔法を閉じ込める競技だ。
ちなみに5年ぐらい前の最新魔法科学に乗っていた論文で、そのころ大反響があったものだが、発表される前にも見たことがあるとは口が裂けてもいえなかった。
ちなみに今は対戦相手が魔法をかけ終わるのを待っているところだ。この試合はいかに「魔法を閉じ込めやすい石」を選び「強い魔法を閉じ込める」か、で勝敗が決まるものらしく・・・。
普通魔法の「力を借りるための詠唱」で一分も唱えるやつなんて始めてみた。そりゃ長いほうがより多くの力を借りれるとはいわれているが・・・。いや、それでも一分は長すぎる！！
まあ、俺の＜エクスプロージョン＞を負かさなければなければならないのだから並大抵では勝てないと思ったということか・・・。
魔法には属性とレベルがある。＜エクスプロージョン＞は火のＬ１６。普通、Ｌ７まで使えればその属性の魔法は「使える」といい、Ｌ１４まで使えるとその属性は「マスターした」ことになる。Ｌ１４とＬ１５の間に大きな壁があるためだ。
たまに魔法使いでもＬ１５より上の存在を知らないものもいる。基本的に必要ないんだよなー。
「＜アクアアロー＞」
ゼイゼイいいながら唱え終わったが、水のＬ１２。この前の遺跡で魔法生物を消した技＜アイシクルアロー＞が氷のＬ１２。
よっぽど完成度が高い＜アクアアロー＞じゃない限り負けないだろ

う。
そして判定方法は互いの石を開放してぶつけて魔法が打ち勝ったほうが勝ちだとか。
が、
＜エクスプロージョン＞対＜アクアアロー＞は一回戦から出てくると予想してなかったらしく、またまたされる羽目に・・・。

『さあ、一回戦から白熱しております！＜エクスプロージョン＞対＜アクアアロー＞いったいどちらが勝つのでしょう！！』
現金な放送がかかる。
近くに人がいると巻き込まれるためリモートコントロールで開放、ぶつけるらしく、今の俺は見ているだけだ。
そしていま、互いの石が開放された。
赤い爆発のエネルギーが轟音とともに解放され＜アクアアロー＞を「なかったこと」にした。

Partner light15

魔力は
燃える炎の様
太陽の光に力をもらう
霊力は

Partner light #15

鋭い風の如く
月の光に輝く
精神力は
研ぎ澄まされた一滴の水
氷とともに水星からそそぐ
気力は
力強い土を思う
遠く土星から存在がある

その後、二回戦は相手が棄権してくれたため楽に進め、三回戦は『魔法の皮袋』の製作で、普段使っているやつをもう一個作ったら勝てた。あの皮袋をひとつ売ったら一週間は確実に暮らせるらしい値段がつけられた。
そして、四回戦は・・・
「戦闘、ですか・・・。」
今、俺の隣にはレンがいる。わざわざ見に来てくれた。ほかの二人は今は別の試合を見に行ってるとか。薄情な奴等め。
「まあ、どうにかなると思うが。剣の持込が出来ないのがつらいな・・・。」
「魔法のみ、だからですよね？」

俺の剣は試合中はレンが持っていてくれることになった。
「魔法剣は認めないってことなんだよなー。」
ひどい、横暴だ、とは毒づいてみるものの・・・。普通に魔法剣が出てくる可能性を運営委員会は考えていなかったのだろう。
「ま、とりあえずいってくるわー。」
いってらっしゃい、とレンが言ってくれた。

暗い門から出る。
ひらけたそこは日の光の当たる砂地の闘技場だった。はっきり言って、歩きにくいし照り返しはひどいし環境は最悪だ。
魔法も使いにくい部類が多く出る。
まず、土のＬ１のアースなんかは地面が固くないと使いにくいし、風系の魔法は確実に砂を舞い上げる。
どういう作戦で行こうか・・・。
そうこうしてる内に相手側も登場してるじゃん。
そして、ゴング・・、銅鑼が鳴る。
「＜土よわが友よ、我ソラリスファに力を貸したまえ＞」
どうにか先手をとらねえと・・・。
地の魔法はＬ８から土というより重力になる。これなら砂を巻き上げなくてすむだろう。
「＜グラビティボール＞」
俺はそのボールをぽいっと投げる。
相手側の足元に落ちた。動きからして魔法ではじいたのだろう。
「＜ランヴァフェクト＞」
木のＬ１３・・。かなり強い捕縛の魔法だが・・・。木の魔法は地面からしか来ない！
「＜グラビティシールド＞」
土系のたて呪文でそれを打ち消すが・・・。
「・・・意外と強いな。」
完全に消せねえ・・・。

俺はとっさに上に飛ぶ。魔法が追ってくる前に・・・
「＜グラビティアクト＞」
「＜ランヴァアロー＞」
打消しと同時に相手からの追加が入る。
俺から少々離れた場所から木の矢が発射される。地面に降りたところに攻撃が届くように発射さえているようだ。
「・・・＜グラビティアロー＞」
同じアローで迎え撃つ。そして追い討ちに・・・。
「＜アースシェイク＞！！」
砂地に足が着いたと同時に地震の魔法を放つ。術をかけた俺以外は立っていることが出来ないだろう。
「・・・砂に吸収されているな。」
やわらかすぎる地面にはききにくかったか・・・。
が、時間を稼ぐには十分だ。
「＜有よ、我友よ、我ソラリスファに力を貸したまえ＞」
無属性の対極にある有属性の魔法を使う。土や木よりずっと高度な魔法になるがこっちの方が使いやすい。それに強いし。
俺は魔法を具現化するために掌にエネルギーをためる。
そのまま出来るだけ相手に近づく。まだ相手は体制を整えきれてない。これは確実に入る！
「＜デストロイ＞！！」
爆風で砂が巻き上がる。
この魔法は至近距離で決まるとだいぶ強い破壊力となる。
有魔法は物理攻撃のようなものなので魔法使い相手なら一番効きやすい魔法である。なんせ、魔力や精神力ではダメージを押さえる事は出来ないのだ。
これで終わったつもりだが・・・。
「＜ランヴァストーム＞！！」
相手からの最後の足掻きだ。地面から生えてきた大量の太い蔓が俺を巻き込もうとするが。

「＜ロット＞」
腐敗の魔法だ。実態があるものは確実にこの魔法で相殺できる。
そして・・・
「とどめだ！＜ソード＞！！」
ブン、と軽く握った右手にエネルギーで作られた剣が現れる。
そしてその剣を薙ぐ。
「・・・みねうちだ。」
相手はその場に崩れ落ちた。
そして銅鑼が鳴る。

「優勝候補だったようだぞ。」
本日の試合は終了し宿に戻ってきたところで真珠が言う。
「道理で強いと思ったんだ。」
「ほのぼのと言わないで下さい。これで優勝者がわからなくなったとみなさん話していましたわよ。」
あんずがそうツッコミをいれてはいるが・・。
「まあ、俺も優勝する気で出てるんだし。とりあえず全属性マスターしてるから大抵の敵には勝つ自信はあるんだぜ。」
あんずが何故か固まる、・・・変なこと言ったつもりはないんだが・・。
「お兄ちゃん、全属性マスターって出来るものなの？確か相対する属性を覚えるのって滅茶苦茶大変だってきいたよ？」
確かに世論はそうなっているが・・・。
「裏技を使って一気に覚えたからそういう感覚はなかったんだよな。」
「・・・・裏技。」
呆れ顔のあんずがいう。
「ああ、裏技。別名自爆技とも呼ぶんだけどさ。」
「何をしたんですの？」
言ってわかってもらえるか微妙だが・・

「最初に四大属性のそれぞれＬ１を覚えてー」
四大属性のＬ１とは火＜ファイア＞、風＜ウィンド＞、水＜ウォータ＞、土＜アース＞だ。
「均等にぶつけてエーテル化してエーテル状態でレベルを上げると同じレベルの魔法は全部覚えられるんだぜ。」
・・・・わかってない顔だ。
多分「エーテル化」からわかってないと思うが・・・。
「・・・続きの説明して良いか？」
「とりあえず『エーテル状態でレベルを上げる』から説明してほしいところですわ。」
「ぼくは『エーテル化』がわからないです。」
あ、真珠も頷いてる。
「あー、エーテル化っていうのは合成魔法の一種で、同じ四属性内の全ての属性を同じ強さで同じタイミングでかけるっていう合成の仕方で、この場合四大属性のＬ１全てを合成したんだ。
そしたら『エーテル化』が起きて均等に混ざった合成魔法『エーテルＬ１＜分離＞』になって普通の魔法じゃなくて『錬金魔法』っていう錬金術と魔法が混ざったやつに変わるんだよ。」
「普通はエーテル化なんておこせませんわ。少しタイミングがずれただけでも爆発が起こりますもの。」
「うん。死ぬかと思った。」
あ、またあんずがあきれてる。
昔の俺は一般常識とは違う次元の人達といたからなあ。
今は比較的まともな感覚を身につけるにいたっているが。
とりあえず説明の続きだな。
「で、その＜分離＞で分離した物質を＜化合＞を使ってもとの物質に戻すんだ。例えば水を酸素と水素に分離してそれをまた水に化合する、みたいな。
＜化合＞は『エーテルＬ２』だからこれで全ての属性の魔法がＬ２まで使えるようになる。Ｌ２が使えるってことは応用でＬ１も使え

る事になる。そっからあとはエーテルのままレベルを上げるか普通状態で魔法を練習してレベルを上げるか、だな。」

・・やっぱりわかってない顔だ。

「まあ、理屈はそうなってるけど頭で理解できる範囲を超えた世界だからねえ。」

「・・・やっぱり魔法使いなんだな、おまえ。」

真珠が頭痛そうな顔でいった。

Partner light16

常識とは
個人のものであり
その定義を
明確にもてない

Partner light #16

彼の
彼の持つ常識が
彼の普通が
みんなの
常識打破ないことそれに
愚かな君は
全く
気がついていないのであろうか

で、翌日。
今日は二試合あるらしい。
俺の一戦目は・・・。
「合成か。比較的楽なのが来たな。」
で、内容は・・・・・・。

「はあーー魔法剣<サンダボール>」
・・・魔法剣って合成の課題に入るような代物だったのだろうか？
サンダボールの魔法剣なんて普段使ってる程度のものだと認識している
のだが・・・。
ああ、魔法剣って普通に魔法をかけるのの3倍くらい難しいって言

うのが世論だったっけ。
そっかー難しいんだ。
そうだよな。Ｌ４の３倍ってＬ１２だもんな。そりゃ難しいよ。
遠くで係員の「早くしてください」の声が聞こえた。
空耳だろうか？
手に持っている『それなり』の名刀を俺は見た。
「・・・・＜ランヴァ＞」
木のＬ８。
一昔前まで毎日のように使っていた魔法剣をかけた。
・・・・俺の常識ってなんだろう。

「で。」
「協議の結果、剣の持ちこみは禁止だそうだ。」
他の選手が必死になって「合成」の課題に取り組んでるのを横目に俺はあんずと並んでソフトクリームを食べていた。
「魔法大会は魔法のみに頼って、と言う事ですのね。」
「迷惑な事に、「そうです」って言ってた。」
魔法具も杖以外持ちこみ禁止になってるくらいだから無理だろうとは思ったが・・・。
「まあ、あなたなら剣など使わなくても、魔法だけで勝てるでしょうけど。」
「でも結構痛手なんだよなー。」
「そうですか？」
スプーンを口に持っていきつつあんずが言う。
「なんてったて間合いが違うから・・。魔法を唱える時間を考えて間合いを取らなきゃなんねえだろ。」
そう言いつつ俺はワッフルタイプのコーンをかじる。
「いつも剣で戦っているから加減かわからない、と。」
「そういうこと。」
俺はコーンを包んでいた紙を握り、くしゃくしゃにした。

トーナメント表が移る画面を見た。
次の試合の内容を示す『戦闘』の文字が俺の名前の横で点灯していた。

白い砂浜、青い海。
その向こうはまた白い砂浜だった。
「・・・海を挟んで戦闘するのか・・・・・。」
まだ相手は来ていない。閉ったままの扉が砂浜の向こうにたたずんでいた。
水というのも厄介なものだ。しかも海水。確実に電気を通すだろう。
火も消える。
結構距離があるから相手に魔法を当てるのも一苦労だろうし・・・・。
うーん。
お、相手が出てきた。
・・・魔法使いとは思えない風貌。
ていうか、また男。
俺の溜め息と同じに銅鑼がなった。
「<水よわが友よ、我ソラリスファに力を貸したまえ>」
とりあえず妥当なところを唱えておくが・・・・。
この距離では当たらないだろうなー。
かといって、この海を渡るには一般魔法の<テレポテーション>ぐらいしか方法がないし・・・・。
相手の方は・・・浮いてる。
「・・・・一般魔法の妖精の羽、か！」
そういう空に浮かぶための魔法も存在してたなあ。
だが、あの巨体に妖精の羽では・・・
似合わない上に的だよなー。
「・・遠慮なく行くか。<ウォータアロー>」
ばしゅ、と水の矢が発射された。
パシ、と相手に当たる。

が、
「・・・・利いてない。」
あの巨体だ。真っ向から魔法を打ち消してしまったようだ。
そして男がこちら側に着く。
「どうだい、俺様の究極の筋肉は！」
・・・・・・・
「お嬢ちゃんのかわいい魔法ではダメージにならないよ。」
・・・お嬢ちゃん。
「・・・だ・れ・が、『お嬢ちゃん』だって？！」
俺に向かっていったのか？！
「はっはっは、怒った顔もかわいいね～」
あまつさえも「今夜どう？」とかきいてくるし。
「＜アクア＞！！」
強い水流で押し流す。あまり利いていないようだがとりあえず間合いは取れた！
「＜有よわが友よ、我ソラリスファに力を貸したまえ＞！！」
男が走ってくるが、近づけたくない！
あのタイプは嫌だ！！
「＜ストップ＞！！」
一応停止はしたようだが・・・、あれの事だいつ動き出すか・・・。
少しでも有利な状況にしておかないと・・・。
「＜ソード＞」
ぶうん、と右手に魔力の剣が現れる。
相手は・・・、いなくなっている。
後ろか！
ふりかえる。同時に男に向かって走る。
そして首筋に刀身を当てる。
同時に動きを止める。
「首と身体が泣き別れになっても良いなら続けようぜ。」
「以外と速い動きだったな。でも、君に切れるのかい？」

「・・・戦う気は切れるよ。」
微笑み、俺は少しだけ剣を引いた。
小さな切り傷が出来て、相手は気を失った。
なつかしの『心をきる』奇跡魔法だ。
「できるだけ、血を見たくないんだよな。」
薄い線を首筋に刻まれた男は倒れる。その最後の言葉は・・・
「・・・子猫ちゃん・・・・」
だった。
最後に腹に思いっきり蹴りを入れてやろうかとも思ったが、スポーツマン精神にのっとりやめておいた。

会場から出たらあんずが俺の剣を持って待っていた。
「さっきの試合、らしくなかったですわね。」
「・・・聞こえてなかったんだな？」
聞こえてほしくない。確実に後で笑い話にされる内容だし。
「四月が会話は聞こえませんでしたわ。何を話していたんですの？」
「・・・きく――」
「子猫ちゃ～～ん」
あの男！！
そして――――
オレに抱きつこうとしたその男は、完璧に反射で動いていた俺の一撃で―剣を持っていなかったので魔力をこめた振り向きまわし蹴りで―いやな音を立てつつ意識を失い、
試合が終わってから大きな怪我をして
オレに病院まで引きずられてゆく羽目になったのである。

Partner light17

自分を
写すもの
見た目より
心は綺麗でなかった

Partner light #17

だから
それは嫌いだ
飾っているわけでもないのに
ひとは
自分を綺麗だという
否定したくて
傷付けた
自分をそれを

本日は一試合。
準決勝というものだ。
俺は髪を弄びながら戦闘の文字が出ている掲示板を見た。
後ろに振り向くと結んでいない青い髪がついてまわった。
「・・・邪魔だ。」
どうしてゴムを置いてきてしまったんだろう。
「まあ、自業自得ですわね。」
・・・あんずの言う通りではあるが。
「なんかボーっとして返してくれなかったからさあ・・・」
「その姿を見ているとボーっとしたのもお姫様だったのも肯けるがな。」

「うるへー」
慰めにならんぞ、それは。
「似合ってるからいいですよ。」
レンも慰めになってないって・・・。
とぼとぼと会場に向かうのだった・・・。

扉を抜けたらそこは
・・・ミラーハウスもどきだった。
鏡というだけでも嫌なのに、魔力が込められているのにもうひとつ嫌悪を感じた。
「意味道理のマッジクミラーかな・・・」
ぐわーん
相手の姿も確認できぬまま試合が始まった。
「＜有よわが友よ、我ソラリスファに力をかしたまえ＞」
俺はすぐに構える。
「＜シューティング＞」
ドガっとミラーにあたる。それがすぐさま跳ね返ってくる。
俺は1歩右に出てそれを避ける。青い髪が遅れてついてくる。
「やはり・・・」
迷惑な代物だ。今回は余裕でよけれたが・・・・
はっと、魔力を感じ体を傾けながら振り返る。
すぐに元頭のあった場所を雷の矢が通り抜ける。
「さすがにできるようね。」
矢を放った張本人が少し離れた鏡のうえに立っていた。
２０歳くらいの女性だった。いかにも魔導士という感じの服装だった。
しかも過激系。
「可愛い容姿をしてても、準決勝まで進んだだけはあるみたいね。」
「・・・可愛いって言われても全然嬉しくないけどな。」

俺はすぐに構える。
「＜プレス＞」
ぐしゃっと鏡が上から潰された。
女は寸前で飛び上がっていたらしく無傷だった。
「＜ライトニング＞！」
「＜ソード＞」
飛んだときに打った雷を俺は魔力の剣で散らした。
すたっと俺の目の前に立った。
「可愛い上に強いのね。＜スパーク＞！」
ばりっと体に電気が走ったが、寸前で前の戦いの男が張っていたように、魔力防御を張ったため大したことにはならなかった。俺は余裕を見せるようにニヤリと笑った。
「お姉さんもかなりやるね。＜メテオ＞！！」
俺は右手のソードを下げながら思いっきり後ろに飛びつつ、隕石を呼び出した。
かなりの数のガラスが散った。
それで倒せるとは思っていない。
俺は走りながら剣を構える。
あー、髪が邪魔だ！！
女がいるだろう場所に、姿はよく見えないがそこに剣を振るった。
血が散った。
同時に俺は来た方向へと爆風で吹っ飛ばされた。
衝撃でソードが消え、雷に焼かれ右腕が痛かった。
体勢を整えつつ俺は次の魔法を唱える。
「＜光よわが友よ、我に力をかしたまえ＞＜ヒール＞」
まばゆい光の後、火傷は完全に治っていた。
「傷を治すなんて洒落た考えだけど、攻撃はしない気？？」
女は雷の剣を構えた。
「ライジングストーム・シフトソードか・・・」
「ええ、切られたら意識が飛ぶでしょうね。」

にっこりと微笑みつつ握るその剣が、じじっと音を立てた。
「体勢も私のほうが有利。魔法属性からしても、光では大した魔法は使えないでしょう。」
「どうかな・・・・。」
「その綺麗な、強がりな顔が血に濡れるのは壮観でしょうね。」
ふふっと女は色っぽく笑う。
俺は次の魔法のために魔力を練る。
「やぁああ！！」
「＜白蝶＞！！」
女が手にする剣が振り下ろされるのと、俺の魔法の発動は同時だった。
まばゆい光の後、俺は無傷でそこに立っていた。
今のところ、女も無傷だが。
「まさか・・・。」
女の蒼白な顔が見えた。
「その魔法まで取得しているなんて！！」
俺の掌の上にいる3匹の白い光の蝶を驚いた目で見ている。
光魔法の最高位魔法、白蝶。
その名の通りの白い蝶が現れる。
その蝶ひとつひとつが光魔法の全ての魔法を使うことができる。
さっき俺を守ったのは鉄壁という魔法だ。
俺は女と距離を取る。
蝶達は俺の手から飛び去っていく。
「ふん！・・・精神力がどこまで続くかしらね！？＜スパーク＞！」
雷の塊が蝶に当たる。
俺にも少しだけ衝撃が来るが、たいした重さではなかった。
蝶もびくともせずにそこにいた。
「そろそろ終わりにしようぜ・・・。」
俺は右手を上げる。
3匹の蝶と俺とのシンクロ率を最大にまで上げる。

息を吸いこむ。
女が最後の抵抗とばかりに魔力を練った。
俺も最大の力で臨む。
「ノヴァ！！！」
「＜サンダボルト＞！！！！」
３匹の蝶から発された白い圧力は
女の魔法をかき消した。
そして鏡の大半を瓦礫の山へと変え、
立っているのは俺だけだった。
俺はくるりと回り入ったドアへと向かった。
俺の後ろを、青い髪、白い蝶がついてきた。

Partner light18

誰にでも
過去はあり
誰もが
思い出を持つ

Partner light #18

常識にとらわれなかった
あの頃
無茶しても
進めた
今は立場が変わって
今は
今で
面白い

上から見た闘技場は他人事としか思えない雰囲気だった。
「・・・こんな風に見えてるんだ。」
砂地の闘技場。
最初の試合で使った闘技場だ。
これから始まる試合には出ないので、実際他人事なのだが、何か不思議な感じがする。
双方の扉が開き二人の男が現れる。
二人ともいかにも魔導師といった風貌だ。
だが、実力は大きく開いている。
左の扉から入ってきた２０代前半黒髪の青年の方が明らかに勝っている。

そして
いつもの鐘がなる。
双方とも詠唱を終えた。
黒髪の青年の方が放った雷の魔法＜スパーク＞が炸裂する。
だが、アレが本気ではないようだ。
対する男の業火＜ブレイズ＞で打ち消されていた。
畳み掛けるように男は炎の爆発＜エクスプロージョン＞を唱える。
青年のほうは・・・・
・・・打ち消した。
どんな魔法だろう。特殊系だとは思うが・・・。
驚いている相手にさっきとは段ちの＜スパーク＞を叩き込み
あっという間に試合は終わった。

掲示板を見る。
「見覚えがありますわよね？」
あんずが隣から声をかけてきた。
掲示板には俺の名前「ソラス・エイプリル」と、さっきの黒髪の青年「レイドール・レイス」の名前が並ぶ。
「まあ、本名とは限らないし。俺は略称だしさ。」
お家の都合上俺の本名は結構長い。
「あなたが本名を使うとロクな事にならないと思いますけど？」
「んー、正体ばれると厄介だしね。」
知ってか知らずかあんずも同意してくれた。
それにしても・・・
「見覚えがあるなあ。」

夜。
やっと髪ゴムを買い、いつものように後ろで束ねた後、俺は剣を背負い酒場へと繰り出した。
久々に、酔わない程度にだが飲もう。

ばん、とドアを開ける。
・・・。
見られてる。
そりゃそうか、明日決勝戦で、その出場者だもんな。
当たり前か。
俺は視線を抜けカウンター席につく。
「えっと・・・。モルト・ウィスキーを・・・。」
なんかやりにくい。
ほどほどの銘柄のウィスキーを飲みつつ、ほどほどで切り上げようかと迷っていると
「お嬢ちゃん、魔法大会の子だろ？」
また、お嬢ちゃん・・・。
「魔法大会には出てるけど、お嬢ちゃんじゃないよ。」
下手なイザコザは起こしたくない一心で俺は怒りを押さえた。
声をかけた男は意外そうに、ほう、と言った。
そんなに女に見えるのか、俺は・・・。
「明日の自信はどうだい？相手は暁の星の魔道士だからなあ。」
別の男が言う。
「ああ、なるほど。聞いた事あるわけだ。」
俺は感心しながら言った。
「君の名前もどっかで聞いたことあるような・・・」
ああ、昔取った杵柄・・。
「あー、5年ほど前に？」
そうそう、と男は頷く。
「3人組のメッチャ強い奴等だろ？」
「デーモンを一捻りにしたとか、賊を数組壊滅させたり、って奴等だろ？」
ああ、耳がいたい。昔はそういうのが日常茶飯事だったけ。
周りが盛り上がってきたし、ほどほどにお茶を濁して帰ろうかとしたとき・・・。

ばたん。
入ってきたのはレイドール・レイスだった。

何でだ。
なんでまだ飲んでるんだ。
「いやー。ホントにあのソラスなんだな？」
「だから、何度も言ってるだろ！」
右に暁の星の戦士ウィド、左に魔道士レイドール。
逃げられない。
「一回手合わせしようぜ～。その剣、あのモントヴァンだろ？」
「明日は僕との試合だから、ウィドはまた今度なー」
俺ぬきで話しが進むなら帰らせろよ・・・。
しゃあない・・・。
「手合わせしたら帰らせろ。」
俺はウィドにそう言い、カウンターに金を置いて剣を持ち、店を出る。
後ろを二人がついてくる。

街の中でも住宅が少ない地域の公園。
俺はクレイモア状態のモントヴァンを抜き、構えた。
相手も大剣を構えた。
相手が走る。
左から来る一撃をモントヴァンで受けようと思い剣を構えたが・・・。
俺は上に飛んでいた。まともに食らったらモントヴァンが折れていただろう。
「オレのプレシューズの一撃を避けるとはな・・・。」
「食らったら剣が折れるだけじゃすまねえだろ。」
そう言いながら俺は構え直す。そして左手に魔力を込める。
走る。相手の攻撃範囲に入る、とたんウィドは剣を横に薙ぐ。

俺はその剣のブレイドに左手の中指薬指を置き、その多めのフォアブルを感じつつ相手の背後に飛んだ。
首筋にエッジを感じたらしくウィドは右手を上げた。
「強いがその剣を活かしきれてないな。」
「ああ、修行中だ。」
俺はぶっきらぼうに答えた。
お互い剣をおろす。
「いやー。面白かった。」
「お前は良い御身分だな、レイドール。」
ウィドの一言にレイドールはひらひらと手を振りながら答える。
「まあ、明日は僕の番だし。」
「俺は2戦もやる羽目になってるじゃねえか。」
モントヴァンをシースに収めながら、俺は言った。
「じゃあ、ひとつだけ。」
レイドールは少し離れる。
「＜闇の力よ、僕レイドールに力を貸して、全てを飲み込む力を＞・・・何か魔法を唱えてよ。L12くらいで。」
「急だな・・・。＜氷よ我友よ、我ソラリスファに力をかしたまえ＞」
弓を引く体制を構える。
「行くぞ。＜アイシクルアロー＞」
「＜スワロウ＞！」
黒い闇が俺の放った氷の矢を食った。
「・・・俺はそれより昼間の奇跡魔法が見たいかな。」
あの、魔法を打ち消したやつのことだ。
「あれは、相手の魔法が弱くないと難しいんだー。L1くらいで。」
「了解。＜アイス＞」
氷の塊が俺の手から打ち出される。
レイドールの手に当たる。
「よっと。」

消えた。
「魔法を分解したのか・・・？錬金魔法・・？」
「ちょっと違うけど・・・今日はここまで！あ、僕は明日、魔法防御を上げる装備で行くから、あしからず～」
「ちょ、卑怯じゃね？」
「そっちもそのつもりで～～。」

明日は大変になりそうだ。
とりあえず、ほどほどに起きて、
革袋の中から探し物だ・・・。

Partner light 19

隠していたものは
小さく
忘れていたものは
大きかった

Partner light #19

あの日のことは
記憶の彼方だが
指先の
熱さを
思い出した
そう
見えない力
見えない心

昨日に引き続き青い髪が俺の後ろを追う。
せっかくゴム買ったのに・・・。
「やっぱり結んで良いか？」
「許しませんわ。」
いつもと違う服、いつもと違う髪型。
「・・・はあ。」
歩くたび黒のロングコートが広がる。
「そんな服持っていたのだな。」
「2、3年前くらい前はこれ着てたんだけどさ。魔法防御は高いんだけど、物理防御とか動きやすさとか考えると・・・。」
黒のロングコート、紺のハイネックセーター、そして紺のジーンズ

はふとめの革のベルトで締めてある。
青い髪は上のほうだけ束ねて蝶の形の髪留めで止めていた。
・・・自分で言ってて寒いが、俗に言うお嬢様結びだ。
「こんな予定じゃなかったのに・・。」
「あんないい加減に留めているよりましだと思うがな。」
朝、髪留めを、面倒なので簡単に留めていたのだが、あんずの猛反対に遭い結びなおされた。
城から持ち出した数少ない持ち物のひとつで、魔法防御、魔法強化等の力がある。
「これ、どれくらい値のはるものですかね・・？ぼくの故郷でも見ないほどの逸品です・・。」
俺の頭に止まる蝶を見ながら後ろを歩くレンが言う。
「さあなあ、あの頃は正味お金とか気にしてなかったし。」
「いい生活ですわね。」
あんずが蝶に触れながらいやみを言ってくれた。
闘技場の門が見える。
「とりあえず、いってくる。」
俺は真珠にモントヴァンを預ける。
「とりあえず勝って来い。」
ポン、と背中をたたかれた。

ごつごつした岩肌が周りを囲む。
採石場さながらの闘技場に俺とレイドールが立つ。
『これから、決勝戦が始まります！！なんという組み合わせでしょう、――――』
軽快なアナウンスが続く。
人も今までにないほど多い。
どういう手で攻めようか・・・・。
ふと、顔を上げる。
優勝商品が見える。

お袋の―母様の時計。
めまい――『炎の化身よ』『渦巻く怒りよ』『召喚―』――言葉の渦。
そうだ。子供の頃は召喚も使えたっけ・・・。
唐突に思い出していた。
使い方も。
何を呼び出したかも。
場面は相変わらず消えているが、ひとつ思い出した・・・。
『さあ、最後の戦いを始めましょう！！！』
いっけね！
俺は我に返った。そして構える。

銅鑼の音。

「＜炎よ我友よ、我ソラリスファに力をかしたまえ＞＜ブレイズ・シフトソード＞」
炎の剣を手に俺はレイドールの出方を見る。
ばしゅ、と風の矢が頬の真横を通る。かわすことくらい想定内だろう。
俺はその場から横に数歩飛び岩陰に入る。
間。
身を潜めていた岩の上に飛び乗る。
すぐに来た風の矢を炎の剣で散らし、そのまま弓を引く体勢を取る。
「＜フレイムアクト・シフトアロー＞」
先ほど風の矢が放たれたところに放つ。
炎の小爆発を秘めた矢はかき消されたが、俺の手には最初と同じ剣が収まっていた。
目的の場所で横に凪ぐ。
岩を溶かしながら切断する。そして次の手ごたえの前に剣は霧散した。

「弱い魔法じゃないと消せないんじゃなかったのかよ？」
「あれ、うそ。気づいてるでしょ？」
軽めな声、その主レイドールが姿を現す。
俺は数歩下がる。
「慰謝料請求すんぞ、っと＜エクスプロージョン＞！」
「＜アトマスピア＞！」
この組み合わせはヤバイ！大量の炎に大量の空気だ！！
俺はすぐにできるだけその場を離れる。
予想通りの大爆発。俺は両手に気力を集め、壁を作る。
お互い吹き飛ばされつつ体制を整える。
「＜フレイムアロー＞」「＜エアアロー＞」
爆発、相殺。これは・・・。
「属性変えないと危ないねえ。」
「せーの、で変えるか？」
お互いまた数歩離れる。
「「せーの」」
「有よ我友よ、我ソラリスファに力をかしたまえ＞」「＜水の力よ、
僕レイドールに力を貸して、全てを飲み込む力を＞」
「＜プレス＞！！」「＜オーシャン！！＞」
俺の方がレベルは低い
魔力の量を追加し何とか打ち消す。
「＜ソード＞」
間髪いれずに放たれた水の捕縛魔法をソードで打ち消す。
「＜ドレイン＞！！」
ソードの魔法に魔法をかける。
「そういう魔法剣もありなんだ。」
感心したように言うレイドールの手から水の爆発が放たれる。
俺はそれを紙一重で抜け、剣を振るう。
表面を撫でただけだった。
しかし、ドレインが発動し、時間を稼げるはずだった。

俺は津波のような水流に押し流された。
「さすがにソードの魔法までは消せなかったよ。」
服は防水の魔法がかけられていたが、髪から水が滴る。
「本気を・・・出させてもらうぞ・・・。」
俺の声の高さが変わったことに気がついたのだろう。
本来俺の声は高い。そっちのほうが魔法も使いやすい。
左手を前に出す。
「＜メテオ＞！」
レイドールがいた辺り一面が隕石で押しつぶされる。
「＜サーフ＞！！」
「へえ、アレでも立ってられるんだ・・・。」
俺はそうつぶやきながら剣を構える。
今度の大量の水は、
俺のソードに吸収された。
魔法剣の応用だ。
足のクッションを利用して、最初の一歩を踏み出す。
次の瞬間にはレイドールの目の前にいた。
「お返しするわ。」
俺は言葉遣いが戻っていることも気にせず水の最高レベル魔法を吸った魔法剣を振るった。
そのまま横を抜け、振り向き、ソードを地面に刺し、胸の前で手を組みそのまま指を伸ばす。
「まだやるなら、相手をしますが？」
「・・・・。」
レイドールは黙って両手を挙げた。

Partner light 20

体を縛る
鎖
それは心さえも
縛る

Partner light #20

失ったものは
その先に
あるのだろうか
手繰り寄せたら
いや
鎖を解いて
蝶のように
飛べたら

「お兄ちゃんは召喚も使えるの？」
控室でそう声をかけてきたのはレンだった。
俺は髪留めをはずし、タオルでガシガシと髪を拭く。
「子供の頃は・・・。城の記憶と一緒にどっかいってたみたい・・。よくわかったな。」
声は戻っている。
「門が開いてたから・・・。ドラゴン系？」
召喚士であるレンは門まで感じれるのか・・・
「フレイムドラゴン。ドラゴンは得意属性しか呼び出せないと思う。」
「ぼくは7種類くらいかなあ・・。」

レンは指を折りつつ数える。
「貴方たちはそれがどれほど凄い事かわかって話をしているのかしら？」
準決勝の女。こいつが3位らしい。
「えっと・・・ぼくは召喚士ですし。」
「ドラゴンなんて上級なモノ、ほいほい召喚しないわよ。」
「ていうか、ソラスの場合は地声以外で魔法を使ってたわけだし。」
えっ？と周りが俺を見る。なんで??
「まさに化物ね。」
「なんで？確かに地声の方が使いやすいけどさ。」
覚めた目で見つめてくる女に向かって俺は反発するが・・・。
「普通使えないでしょ。力がうまく入らないもん。」
レイドールが追い討ちをかけてくれた。
「お兄ちゃんの声って地声じゃなかったんだ。」
とこれはレン。
「うん。本気を出し始めたらもっと高かった。なんていうか―――」
「女みたい、だろ。」
俺の言葉に頷くレイドール。正直頷かないでほしいぞ、そこは。
「いろんな魔法に引っ張られてさ、あんま安定してねーんだよな。」
俺はコートを脱ぎ椅子にかける。服の中に入り込んだ水をぬぐう。
「それは僕も感じた。過去の魔法が解けきってないし、今も封印されてる。」
俺は無意識に左肩に手をやった。そこに刻まれたタトゥーはもうないが確実に俺を縛りつづけている。
性別すら不安定な身体、記憶の飛んだ心、自分で操れない魂。
「普通の人間じゃ、身体が押しつぶされるほどの封印がかかってる。・・・だよね？」
俺は頷く。
「小さい頃からずっとだから馴れたけどさ。今でも引きずられてる。」

「私はそんな相手に負けたのね・・・。」
女ががっくりと肩を落とす。
「仕方ないって、あのソラス・エイプリルだもん。それに・・・」
あのって何だ、と言う暇すらなかった。
「ティナ・サクラだろうし。」
「・・・
いつ気づいた??」
唖然とする女を横目に俺はレイドールに問う。
ティナ・サクラは俺の別名だ。性別が不安定なことを使い、女の姿で用心棒をしていた時の名だ。名前が売れすぎて男の姿で生きづらくなって、ほとぼりが冷めるまで女でいた。
「声が同じだったし、左肩を押さえたし。ティナ・サクラも同じ癖があった。」
「・・・どこで会った?」
「えっとね〜」
「ちょっと待ちなさい!!!」
女が立ちあがる。
「あの、ティナ・サクラ?!!」
「さっきから“あの”ってなんだよ!」
そんな事どうでもいい、という風に女は手を振り広げる。
「あの最キョウ魔剣士ティナ・サクラ本人なの?」
俺は頷く。
「ティナは男だったの・・・?」
「いや、ティナで動いてるときは女だったんだけど・・・。」
「で、結局どっちなんですか?」
レンが笑顔で聞いてくる。正直一番断われない相手だ。
「えっと・・・、微妙・・・。」
はあ?と3人の顔が言っている。
俺は指を折りながら数える。
「うん。生まれたときはたぶん男だったんだけど、すぐに女になっ

て・・・結局女でいるほうが長いし。
・・・そんな不審者か化け物を見るような眼で見るなよ。」
「それは無理な相談だと思うけど？」
それはひどいです、レイドール。
って言う間もなく、
「やっぱりお兄ちゃんって普通じゃないですね。」
「好きに性別を変えられるなんて、化け物決定よ。」
畳み掛けられた。
「お前ら・・・。」
なんかもう、怒る気にもなれねえ・・・。
結局、ティナの名前も有名になりすぎて今はソラスなんだから、何のために別名を使ってたのかわかんなくなっちまってるし。

「優勝、ソラス・エイプリル～～！！！」
中が空洞の台の上に立ち、目の前の女性にメダルをかけてもらう。
あまり勝ったことはうれしいと思っていない。
いや、時計が手に入ることが嬉しすぎて麻痺しているのかも。
赤い布を下に引いた時計が目の前に運ばれてくる。
母様の時計・・・。
手に取る。
ずっしりと重い、機械仕掛けの彼。
あの時と、同じ。

宿に戻って一人で見つめる。
蓋を開ける。
重厚で、
サクラ時計の証である、無駄のない文字盤。
そこから覗く機構部分。

美しい。
本当に。
・・・本当に。
ふと、
『ソラリスファ。』
声を思い出して。
泣きそうになってしまった。
懐かしくて。
暖かくて。
泣くのが嫌で。
腕を下げた。
時計が太ももをかする。

とたん。

Partner light 20（後書き）

感想もらえると小躍りして喜びます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4576d/

Partner light

2010年10月8日14時37分発行